

# 恐怖の口笛

海野十三

青空文庫



逢<sup>お</sup>う魔<sup>ま</sup>が時<sup>とき</sup>刻

秋も十一月に入つて、お天気はようやくく崩<sup>くず</sup>れはじめた。今日も入<sup>いり</sup>日は姿を見せず、灰色の雲の垂<sup>た</sup>れ幕<sup>まく</sup>の向<sup>ま</sup>う側<sup>がわ</sup>をしのびやかに落ちてゆくのであつた。時折サラサラと吹いてくる風の音にも、どこかに吹<sup>ふ</sup>雪<sup>ぶ</sup>の小<sup>こ</sup>さな叫<sup>こゑ</sup>び声<sup>こゑ</sup>が交<sup>ま</sup>じつてい<sup>い</sup>るよ<sup>う</sup>に思<sup>おも</sup>われた。

いま東<sup>ま</sup>京<sup>る</sup>丸<sup>ま</sup>ノ内<sup>うち</sup>のオア<sup>ひ</sup>シス、日<sup>ひ</sup>比<sup>び</sup>谷<sup>や</sup>公<sup>こう</sup>園<sup>えん</sup>の中<sup>なか</sup>にも、黄<sup>た</sup>昏<sup>そ</sup>の<sup>が</sup>色<sup>れ</sup>

がだんだんと濃<sup>の</sup>くな<sup>つ</sup>てきた。秋<sup>あ</sup>の黄<sup>き</sup>昏<sup>こ</sup>れ<sup>ど</sup>きは、な<sup>ぜ</sup>こ<sup>の</sup>よ<sup>う</sup>に淋<sup>しみ</sup>しいのであ<sup>ら</sup>う。イヤ時<sup>とき</sup>には、ふ<sup>つ</sup>と恐<sup>おそ</sup>ろしくなることさ<sup>え</sup>あ

る。云い伝えによると、街の辻角つじかどや林の小径こみちで魔物に逢うのも、この黄昏れ時だといわれる。

このとき公園の小径に、一人の怪しい行こうじん人が現れた。怪しいといったのはその風体ふうていではない。彼はキチンとした背広服を身につけ、型のいい中折帽子を被り、細身の洋杖ケーンを握っていた。どうみても、寸分の隙のない風采ふうさいで、なんとなく貴族出の人のように思われるのだった。しかし、その上品な風采に似ずその青年はまるで落付きがなかった。二三歩いってはキョロキョロ前後を見廻みまわし、また二三歩いっては耳を傾け、それからまたすこし行つては洋杖ケーンでもって笹の根もとを突いてみたりするのであった。

「どうも分らない」

青年は小径の別れ道のところに立ち停ると吐きだすように眩つぶやいた。そして帽子をとり、額の汗を白いハンカチーフで拭ぬった。青年の白はくせき皙な、女にしたいほど目鼻だちの整った顔が現れたが、その眉びう宇の間には、隠しきれない大きな心配ごとのあるのが物語られていた。——彼はさつきから、懸命になって、何ものかを探し求めて歩いていたらしい。

「どうして、こんなに胸騒むねさわぎがするのだろうか」

青年は心の落付きをとりかえすためであろうか、ポケットから一本の紙卷煙草シガレットをとりだすと口に銜くわえた。マッチの火がシューツと鳴って、青年の頤あごのあたりを黄色く照らした。夕闇の色がだんだん濃くなってきたのだった。

いま青年の立っているところは、有名な鶴の噴水のある池のところから、洋風の花壇の裏に抜けてゆく途中にある深い繁みであった。小径の両側には、人間の背よりも高い笹藪がつつづいていて、ところどころに小さな丘があり、そこには八手や五月躑躅が密生していて、隠れん坊にはこの上ない場所だったけれど、まるで谷間に下りたような気持のするところだった。——青年は何ともしれぬ恐怖に襲われ、ブルブルツと身を慄わせた。気がつくと、銜えていた紙巻煙草シガレットの火が、いつの間にか消えていた。

そのとき、何処からともなくヒューツ、ヒューツ、と妖しき口笛が響いてきた。無人境むにんきように聞く口笛——それは懐なつかしくなければならぬ筈のものだったけれど、なぜか青年の心を脅おびやかすばかり

に役立った。聞くともなしに聞いていると、なんのことだ、それは彼にも聞き覚えのある旋律メロディであつたではないか。それはいま小学生でも知っている「赤い苺いちごの実」の歌だつた。この日比谷公園から程とおからぬ丸ノ内の竜宮劇場りゆうぐうげきじょうでは、レビュー「赤い苺いちごの実」を三ヶ月間も続演しているほどだつた。それは一座のプリ・マドンナあかぼし赤星ジュリアが歌うかのレビューの主題歌だつた。

「誰だろう？」

青年は耳をそぼだ敬そぼだてて、その口笛のする方をうかが窺うかがつた。それは繁みの向う側で吹きならしているものらしいことが分つた。

「……あたしの大好きな

真紅まつかいぢごーな苺いちごの実

いづくにあるのでしょ

いま――

欲しいのですけれど」

青年は心配ごとを忘れて、その美しい旋律メロデーの口笛に聞き惚れ

た。まるでローレライのように魅惑的な旋律だった、そして思わず彼も、「赤い苺の実」の歌詞を口笛に合わせて口吟くちぎさんだのであった。……しかし、やがて、その歌の中の恐ろしい暗示に富ん

だ歌詞に突き当たった。

「……別れの冬木立ふゆこたち

かたみ遺品にちようだいな

あなたの心臓を

ええ——

あたしは吸血鬼……」

赤い苺の実というのは、実は人間の心臓のことだと歌っているのである。ああ、あたしは吸血鬼！

青年紳士はハツと吾れにかえった。賑にぎやかな竜宮劇場の客席で聞けば、赤星ジュリアの歌うこの歌も、薔薇ばらの花のように艶あでやかに響くこの歌詞ではあったけれど、ここは場所が場所だった。黄昏の微光にサラサラと笹の葉が鳴っている藪蔭である。青年はその背筋が氷のようにゾツと冷たくなるのを感じた。

と、——

その刹那せつなの出来ごとだった。

キ、キヤーツ。

突如、絹を裂くような悲鳴ひめい一声いっせい！

「呀あツ、——」

それを聞くと青年紳士は、その場に棒立ちになった。悲鳴の起つた場所は、いままで口笛のしていたところと同じ方向だった。大変なことが起つたらしい。青年紳士の顔色は真ま青あおになった。

彼は突然身を躍らせると、柵を越えて笹藪の中に飛びこんだ。

ガサガサと藪をかきわけてゆく彼の姿が見られたが、暫しばらくするとそのまま引返して来た。そしてまた小径に出て、こんどはドンドン駈けだした。どうやら竹藪の中は行き停りだったらしい。口笛

はまだ微かに鳴っている。

随分遠まわりをして、彼はやっと口笛のしていた場所へ出るこ  
とが出来た。それは悲鳴を聞いてから四五分ほど経つてのちのこ  
とだった。

「……？」

さて此処ぞと思う場所に出たことは出たけれど、そこには葉の  
よく繁つた五月躑躅がムクムクと両側に生えているばかりで、小  
径はいたずらに白く続き、肝腎の人影はどこにも見当らなかつ  
た。彼はなんだか夢をみていたのではあるまいかという気がした。  
しかし彼は確かに悲鳴を自分の耳底に聞いたのだった。そして  
悲鳴などは、いまの彼として聞いてはならぬものだった。なぜな

らこの青年紳士は、先刻さつきから一人の肉親の弟を探しまわっているのであつたから。

なぜこの紳士は、弟を探さが廻しまわらなければならなかつたか？

それは後に判ることとして、今作者は、この場を語るにもつと急であらねばならないのだ。

彼はすこし気が落ちついたのであろうか、こんどはしつかりした態度に帰つて、あたりを熱心に探しだした。ここの繁み、かしのこの繁みと探してゆくうちに、とうとう彼は一番こんもりと繁つた五月躑躅の蔭に、悲しむべき目的物を探しあてたのだつた。それは小径の方に向いてヌツと伸びている靴を履いた一本の足だつた。

「おお、——」

青年紳士は、その場に化石のようになって、突立つったつた。

にじゆう  
一一重の致命傷ちめいししょう

青年紳士は暫くしてから気を取り直すと、静かに芝草の中へ足を踏み入れた。そして屍体したいの方に近づいて、その青白い死顔を覗のぞきこんだ。

「おお、四郎……」

と、彼は腸はらわたからふり絞るような声で、愛弟あいていの生前せいぜんの名を呼んだ。

ああ、何という無惨！

五月躑躅さつきの葉蔭かげに、学生服の少年が咽喉のどから胸許むなもとにかけ真紅まっかな血を浴びて仰向けおあむに仆たおれていた。青年は芝草の上に膝を折って、少年の脈搏を調べ、瞼まぶたを開いて瞳どうこう孔を見たが、もう全く事切れていた。そして身体がグングン冷却してゆくのが分った。

兄は悲しげにハラハラと落涙らくるいした。

「死んでいる。……四郎、お前は誰に殺されたのだ」

屍体は肉親の兄西一郎にしいちろうにめぐりあい、おのれを屠ほふった恨深い殺人者について訴えたいように見えたが屍体はもう一口も返事

することができなかつた。

兄の一郎は涙を拭うと、血にまみれた屍体を覗きこんだ。そのとき彼は屍体の頤あごのすぐ下のところに深い、溝みぞができているのを発見した。よく見ると、その溝の中には細い鋼はがねの針金らしいものが覗いていた。

「おや、これは不思議だ。絞殺されたのかしら」と一郎は目を瞳みはつた。「それにしても、胸許を染めている鮮せん血けつはどうしたというのだろうか」

絞殺に鮮血が噴ふきでるといふのは可笑おかしかつた。なにかこれは別の傷口がなければならぬ。一郎は愛弟四郎の屍体に顔を近づけた。そして注意ぶかく、屍体の頭に手をかけると首をすこし曲

げてみた。

「ああ、これは……」

屍体の咽喉部は、真紅な血糊ちのりでもって一面に惨たらしむごく彩いろどられていたが、そのとき頸部けいぶの左側に、突然パツクリと一寸ばかりの傷口が開いた。それは何で傷きずけたものか、ひどく肉が裂けていた。その傷口からは、待ちうけていたように、また新しい血潮がドクドクと湧きだした。一郎はハツと屍体から手を離れた。血潮は頸部を伝わって、スーツと走り落ちた。——何者かが頸動脈けいどうみやくを切り裂いたのに違いなかった。

「なんという惨たらしい殺し方だ。頸を締めたうえに、頸動脈まで切り裂くとは……」

だが、これは随分御丁寧な殺し方である。それほど四郎は、人の恨みを買っていたのだろうか。いやそんな筈はない。誰にも好かれる彼に、そんな惨酷な手を加える者はない筈だはず。——一郎は、不審にたえない面持で、もう一度創傷きりきずを覗きこんだ。その結果、彼は屍体の頸部に恐ろしいものを発見した。恐ろしい人間の齒の痕あとを！

それは傷口に近い皮膚のうえに残っている深い齒の痕だった。一つ、二つ、三つと、三ヶ所についていた。もう一つの齒痕は見えなかった代りに、当然そこに齒痕のあるべき皮膚面が抉えぐつたように切れこんでいた。恐らく上顎の糸切齒いとぎりばがここに喰いこんで、四郎少年の皮膚と肉とを破り、頸動脈をさえ喰い切つたのである。

う。ああ、何者の仕業であろう。人間を傷つけるに兇器きようきにこと欠かいたのかはしらぬが、齒をもつて咬かみ殺すとは何ごとであるか。まるで獣けもののような殺し方である。大都會の真中にこんな恐ろしい獣じゆうじん人が出しゅつ没ぼつするとは有り得ることだろうか。一郎は自分の眼を疑った。

「憎にくい奴、非道ひどい奴！——こんなむごたらしい殺し方をしたのは、何処の何者だツ」

このとき一郎は、さつき聞くとともにしに聞いた口笛のことを思い出した。その口笛が弟の惨殺事件になにか関係のあるだろうということは、もつと早く思い浮べなければならなかったのだけだ。彼はあまりに悲しい場面に直面して、ちよつと忘れていたの

であろう。

「そうだ、あの口笛は誰が吹いていたのだろうか？」

「赤い苺の実」の歌——それは、ひよつとすると、殺された弟が吹いていたのかも知れないと思った。

「イヤ弟ではない——」

あの怪しい口笛は、弟の発したらしいキャーツという悲鳴の前にも聞えていたが、それからのち彼が繁みの小径を探そうとして一生懸命になっているときにも、どこからともなく耳にしたではないか。殺された人間が口笛を吹くはずがない。——では口笛を吹いていたのは何者だ。

「ウム、その口笛の主が、弟を殺した獣人に違いない！」

そうだ、あの「赤い苺の実」の歌というのは実は「吸血鬼」の歌なのだ。第五節目の歌詞には「あなたの心臓をちようだいな、あたしは吸血鬼」といったような文句があるではないか。竜宮劇場の舞台から艶やかな赤星ジュリアの歌を聴いているような気持で、あの悲鳴入りの口笛を聴き過ごすことはできない。吸血鬼の歌を口笛に吹いた奴が、あの殺人者に違いあるまい。ひよつとすると、あの妖しい歌に誘われ、蝙蝠こうもりのような翅はねの生えた本物の吸血鬼がこの黄昏の中に現われて、その長い吸盤きゅうばんのような尖とがった唇でもって、愛弟の血をチュウチュウと吸ったのではあるまいかと思つた。とにかく悲鳴がしてから四五分経つて駈けつけたのだから、まだその附近に、恐ろしい吸血鬼がひそんでいるかも

知れない。

「よオし。愚図愚図してないで、その吸血鬼を捉えてやらねばならん」

西一郎は咄嗟に決心を固めた。そして彼は身を起すと、芝草を踏んで、小径の方へ駆けだした。

「こーら、出てこい。人殺し奴、出てこい。……」

彼は阿修羅のようになって、ここの繁み、かしこの藪蔭に躍り入った。彼の上品な洋袴はところどころ裂け、洋杖を握る拳には掻き傷ができて血が流れだしたけれど、一郎はまるでそれを意に留めないように見えた。

公園の東の隅には、元の見附跡らしい背の高い古い石垣が聳

えていた。ここはあまりに陰気くさいので、いかに物好きな散歩者たちも近よるものがなかった。一郎は前後の見境みさかいもなく、石垣の横手から匍はいこんだ。そこには大きな蔭ふきの葉が生え繁しげつていたが、彼が猛然とその葉の中に躍りこんだとき、思いがけなくグニヤリと気味のわるいものを踏みつけた。

「呀あツ——」

と、彼は其の場に三尺ほど飛び上った。

だが彼は、その叫び声に続いて、もう一つの驚きの声を発しなければならなかった。なぜなら、その密生した蔭の葉の中から、イキナリ一人の男が飛びだしたからであった。一郎が踏みつけたのは、その葉かげに寝ていたかの男の脚だったにちがいない。

「……」

一郎は、呼吸いきをはずませて、相手の方を睨にらんだ。ああ、それは何という恐ろしい顔の男であつたろう。背丈はあまり高くないが、肩幅の広いガツチリした体躯の持ち主だつた。そして黝くろずんだ変な洋服を着ていた。その幅広の肩の上には、めりこんだような巨大な首が載つていた。頭髪よもぎは蓬よもぎのように乱れ、顔の色は赭あか黒くろかつた。しかしなによりも一郎の魂を奪つたものは、その男の赭あか顔の半面にチラと見えた恐ろしく大きな痣あざであつた。

「待て——」

一郎は相手を見てとると、勇敢に突進していった。痣のある男はヒラリと身体をかわして逃げだした。

「オイ、待たないか——」

その怪人は、はたして弟四郎を殺した彼の恐るべき吸血鬼であるのかどうかハッキリ分らない。しかし折も折、この夕ゆうやみ暗みどきに人も通らぬ石垣裏の落の葉の下に寝ているとは、たしかに怪しい人物に違いなかった。追いついて、組打ちをやるばかりである。

怪人は物を云わず、ドンドンと逃げだした。その行動の敏すばやいことといったら、どうも人間業とは思えなかった。高い石垣を見上げたと思うと、ヒョイと長い手を伸ばして、バネ仕掛けのように飛び越えた。まるで飛行機が曲芸飛行をしているような有様だった。一郎がようやく石垣を攀よじのぼって、下の池の方を見下みおろすと、かの怪人はもう池の向う岸にいた。池の水面には小さなモー

ターボートでも通つたように、二条の波紋が長くあとを引いていた。どうして彼が池を渉り越えたのやら分らなかつた。

一郎は池を大迂回しなればならなかつた。しかし一郎の予想は當つて、怪人はドンドン西の方に逃げてゆく。そっちの方には弟の惨殺屍体の転がっている竹藪があつた。だから怪人はきつとその辺へ潜りこむつもりだろう。そうなれば怪人の正体もハツキリして来るといふものだ。

「誰か、手を借して呉れーッ」

一郎は声をかぎりに叫ぼうとしたが、咽喉がカラカラに乾いて、皺枯れた弱い声しか出なかつた。そのうちに怪人は、弟の死靈しりように惹きよせられるもののように、問題の藪だたみの方に足を向け

ると、ガサガサと繁みを分けて姿を消してしまった。それを見て一郎はムラムラと復讐心の燃えあがってくるのを感じずにはいられなかった。

彼は急に進路を曲げた。それは抜け道をして、弟の屍体の転がっている裏の方の繁みの中からワツと躍りでるつもりだった。それは怪人の不意を打つことになって、たいへん有利だと思ったからだった。

間もなく一郎は、目的の繁みに出た。それは灌木の鬱蒼うっそうとした繁みで、足の踏み入れるところもないほどだった。彼は下枝を静かにかきわけながら前進した。もう屍体のある場所は間近まぢかの筈だった。

「うん、あすこだ」

繁みの葉の間からは、向うに丸い芝地が見えた。近くに電灯がついているらしく、黄色く照し出されていた。その真中には、紛れもなく、力なく投げだされた青白い弟の腕が伸びていた。

すると、そのときだった。奇怪なことにも、その屍体の腕が生き物のようにスルスルと芝草の上を滑りだした。あの大傷を受けた弟が生きかえったのであろうか。いや絶対にそんなことがありよう筈がない。すると――

「あの怪人めが屍体にたかって、また破廉恥はれんちなことをやっているのだな。よよし、どうするか、いまに見ている！」

彼の全身は争鬪心に燃えた。こうなつてはもう誰の救いも要ら

ない。愛する弟のために、この一身を投げだして、カ一杯相手の胸許にぶつかるのだッ。

「さあ来いッ」

彼は一チニイ三ンの掛け声もろとも、エイツと繁みの中から芝草の上へ躍りだした。

「さあ来いッ——」

……と躍りだしてはみたが、そこには思いもよらず——

「アレーッ」

という若い女の悲鳴があつた。

「おお、あなた貴女は……」

一郎はあまりの意外に、棒のように突立ったまま、言葉も頓とみに

は出なかった。意外とも意外、その芝草の上に立っていたのは誰であろう、いま都下第一の人気もの、竜宮劇場のプリ・マドンナ、赤星ジュリアその人だったからである。

### 裂さかれた日記帳

「あら、驚いた。……まあ、どうなすつたの、そんなところから現われて……」

ジュリアは唇の間から、美しい歯並を見せて叫んだ。

しかし彼女は、それほど驚いているという風にも見えなかった。それが舞台度胸というのであるうか。高いところから得意の独唱をするときのように、黒いガウンに包まれたしなやかな腕を折り曲げ、その下に長く裾を引いている真赤な夜会着のふつくらした腰のあたりに挙げ、そしてまじまじと一郎の顔を眺めいった。

「僕よりも、赤星ジュリアさんが、どうしてこんなところに現われたんです」

と、一郎は屍体に何か変わったことでもありはしないかと点検しながら訊ねた。たず

「あら、あたくしを御存知なのネ。まあ、どうしましょう」とジュリアは軽く駭おどろいた身振りをして「あたくしは、いま劇場の昼の

部と夜の部との間で、丁度身体が明いているのよ。一日中であたくしはそのときがいちばん楽しいの。……で、ドライブしていたんですわ、ホラごらん遊ばせ、ここから見えるでしょう、あたくしの自動車くるまが……」

なるほどジュリアの指ゆびさす方に、一台の自動車が、小徑を出たところころに停とっていて、座席には彼女の連れらしい、ずっと年の若い少女よめが乗のっていた。それはジュリアの妹分いもうとにあたる矢走千鳥やばせちどりという踊り子であつたけれど。

「貴女は自動車でここを通りかかったというのですか。よくこれが分わりましたネ。……」

と弟の死骸を指した。

「ええ、それは誰かが叫んでいたからですわ。なにごとか大事件が起つたような叫び声でしたわ。だもんで、自動車を停めて、ここまで来てみると、この有様なんですのよ。貴方<sup>あなた</sup>、たいへんだわ。この学生さん、死んでいましたよ」

「そうです。死んでいるというよりも、殺されているといった方がいいのです。これは僕の本当の弟なのです」

「ええ、なんですって。貴方がこの方の兄さんだと仰<sup>おっしゃ</sup>有るのですか」

「そのとおりです。僕は四郎の兄の一郎なんです」

「アラマアあたくし、どうしましょう」とジュリアは美しい眉<sup>まゆ</sup>を曇らせたが「とんだお気の毒なことになりましたわネ」

と、いつて目を瞑じ、胸に十字を切った。

「そうだ、貴方はいまその辺に見なかつたですか、怪しい男を……」

「怪しい男？　貴方以外にですか」

「ええ、もちろん僕のことではないです。こう顔の半面に恐ろしい痣あざのある小さい牛のような男のことです」

「いいえ。あたくしは今、車を下りて、真直まっすぐにここまで歩いたばかりですわ」

ジュリアはまるでレビューウの舞台に立っているかのように、美しい台辞せりふをつかった。側に立つルネサンス風の高い照明灯は、いよいよ明るさを増していった。

「その痣のある男がどうかしたのですか」

「いや、僕がいま追おいか駈けていたのです。もしや犯人ではないかと思つたのでネ」と一郎は云つてあたりの木立を見廻わした。夕闇はすっかり蔭が濃くなつて、これではもう追駈けてもその甲か斐いがななささそうに見えた。

そこへバラバラと登あしおと音が入り乱れて聞えた。二人がハツと顔を見合わせる途端に、夕闇の中で定かに分らないが、十歳あまりの少年が駈けこんできた。そして後方うしろをクルリとふりむいて大声に叫んだ。

「オーイ、早くお出でよ、大辻きーん」

向うの方からも、別な登音がバタバタと近づいてきた。

「待て待て、勇坊いさぼう、ひとりで駄けだすと、危いぞオ」

そういう声の下もとに、大入道のような五十がらみの肥満漢が、ゼイゼイ息を切りながら姿を現わした。——どうやら二人は連つれらしい。

「大辻おおつじさん。赤星ジュリアの外に、もう一人若い男が殖ふえたぜ」と、少年は小慧こぎかしい口を利いた。

「ほう、そうじゃなア」

そういうところを見ると、既に二人はジュリアが屍体のところへ来たのを知っていたらしい。

「皆さん。そこにある屍体を見るのはかまわなないけれど、手で触つちや駄目だよ。折角の殺人の証拠がメチャメチャになると、警

官が犯人を探すのに困るからネ」と少年はおおまじめ大真面目でいつてから、大辻と呼ばれる大男の方に呼びかけた。「どうだい大辻さん。この殺人事件において、大辻さんは何を発見したか、それを皆並べてごらんよ」

「オイよさねえか、勇坊。みなさんがわら嗤っているぜ」と大辻は頭を掻いた。

「まあ面白いこと仰有るのネ。あなた方はどなた誰方ですの」  
ジュリアは、眼のクルクルした少年に声をかけた。

「僕たちのことを怪しいと思ってるんだネ、ジュリアさん。僕たちは、ちつとも怪しくないよ。僕たちはこれでも私立探偵なんだよ。知っているでしょ、いま帝都に名の高い覆面探偵のせいりゆうお青竜

王うていうのを。僕たちはその青竜王の右の小指なんだよ」

「まあ、あなたが小指なの」

「ちがうよ。小指はこの大辻さんで、僕が右の腕さ」

「青竜王がここへいらっしやるの？」

「ううん」と少年は急に悄しよげ気て、かぶりを振った。「青竜王せんせいがい

れば、こんな殺人事件なんか一と目で片づけてしまっただけれど。

だけれど、青竜王せんせいはどうしたものか、もう十日ほど行方が分らな

いんです。だから僕と大辻さんとで、この事件を解決してしまお

うというの」

「オイオイ勇坊。つまらんことを云つちやいけないよ」

「そうだ。それよりも早く結論を出すことに骨を折らなければ：

…」と勇少年いさむは再び大辻の方を向いていった。「大辻さんには分っているかどうかしらないけれど、この学生さんは始めその木の陰で向うを向いて腰を下ろしていたんだよ。するとネ、学生さんうしろの背後の繁った葉の間から、二本の手がニユーツと出て、細い針金でもって学生さんの首をギューツと締めつけたんだ。それでとうとう死んじやったんだ」

「そのくらいのこととは分っているよ」と大辻が痩せ我慢をいった。「どうだかなア。——そこで犯人は、表へ廻って、この屍体の側に近よった。そして咽喉のところを喰くつ切って血を出してしまつたのさ。こうすると全く生きかえらないからネ」

「それくらいのこと、わしにだって分らないでどうする」

「ヘーン、どうだかな。——殺される前に、学生さんは一人の美しい女の人と一緒に話をしていたのに違いない。その草の間にチヨコレートの銀紙が飛んでいる中に、口紅がついたのが交まじっている」

「ええ、本当かい、それは……」

「ほーら、大辻さんには分っていないだろう。——学生さんは女の人と話しているうちに、女の人にはなにか用事が出来て、ここから出ていったのさ。すぐ帰ってくるから待っていてネといったので、学生さんはじっと待っていた。その留守に頸を締められちまつたのさ」

「青せんせい竜王の真似だけは上手な奴じゃ」

「それからまだ分っていることがある……」

勇少年の饒舌じょうぜつは、まだ続いてゆく。赤星ジュリアは聞き飽きたものかスカートをひるがえして、待たせてあつた自動車の方へ歩いていった。

西一郎の方は、さつきから黙つて、青竜王の部下だという大男と少年の話を聞いていたが、これもジュリアの跡を追つて、その場を立ち去つた。彼はまだ怪人の行方をつきとめたい気があるのかも知れなかつた。

勇少年と大辻とは、それに気づかない様子で、夢中になつて饒舌しゃべりつづけていた。しかし二人の男女が立ち去つてしまうと、思わず顔を見合わせてニツコリと笑つた。

「だが勇坊、お前はいけないよ、あんな秘密なことまで喋しゃべったりして」

「あんなこと秘密でもなんでもありやしない。僕はもつと面白いことを二つも知っているよ」

「面白いことって？」

「一つは赤星ジュリアの耳飾りのこと、それからもう一つは、いまのもう一人の男の顔にある変な形の日焼ひやけのことだよ」

「ほほう。早いところを見たらしいネ。だがそんなことが何の役に立つんだネ」

「それは大辻さんが発見した日記帳以上に役に立つかも知れない」  
「ほう、日記帳！」大辻は何を思ったか、屍体のところへ飛んで

いった。そして屍体の背中をすこし持ちあげると、その下に隠されていた小さな黒革の日記帳をとりだした。彼はその日記帳の頁をパラパラと繰<sup>く</sup>っていたが、突然吃<sup>びっくり</sup>驚して、大声で叫んだ。

「ああ大変じゃ。——オイ勇坊、誰かこの日記帳から何十頁を切り裂いて持っていったぞ。先刻<sup>さつき</sup>調べたときには、こんなことがなかったのに……」

### 奇怪な挑戦状

その翌日の午ひるさがり、警視庁の大江山捜査課長は、昨夜さくやらい来詰つめかけている新聞記者団にどうしても一度会ってやらねばならないことになった。

その日の朝刊の社会面には、どの新聞でもトップへもって来て三段あるいは四段を割さき、

「帝都に吸血鬼現る？」

——日比谷公園の怪屍体——」

とデカデカに初号活字をつかった表題で、昨夕ゆうべの怪事件を報道しているところを見ても、敏感な新聞記者たちは早くもこれが近頃珍らしい大々事件だということを見破ったものらしい。

大車輪で活動が続いている大江山課長は五分間だけの会見とい

う条件でもって、新聞記者団を応接室へ呼び入れた。ドヤドヤと入ってきた一同は、たちまち課長をグルツと取巻いてしまった。

「五分間厳守！ あとは云わんぞ」

と、課長は先手をうった。

「すると本庁では事件を猛烈に重大視しているのですネ」

と、早速記者の一人が酬むくいた。

「犯人は精神病者だということですが、そうですか」

と、他の一人が鎌かまをかけて訊きいた。

「犯人はまだ決定しとらん」

課長は口をへの字に曲げていった。

「法医学教室で訊くと被害者の血は一滴も残っていなかったそう

ですわね」

「莫迦ばか！」課長は記者の見え透いた出鱈目でたらめを簡単にやつつけた。

「犯人は、被害者の実兄だと称している西一郎（二六）なのでしよう」

「今のところそんなことはないよ」

「西一郎の住所は？」

「被害者と同じ家だろうか？」

「冗談いっちゃいけませんよ、課長さん。被害者は下宿住居げしゆくずまいをしているのですよ。本庁はなぜ西一郎のことを特別に保護するのですか」

「特別に保護なんかしてないさ」

課長は椅子にふん反りかえった。

しかし被害者の実兄の住所を極秘にしていることは、何か特別のわけがなければならなかった。課長がすこし弱り目を見せたところを見てとった記者団は、そこで課長の心臓をつくような質問の巨弾を放ったのだった。

「三年ほど前、大胆不敵な強盗殺人を連発して天下のお尋ね者となった兇賊きょうぞく 痣蟹あざがに仙齋せんさいという男がありましたね。あの兇賊は当時国外へ逃げだしたので捕縛を免れたという話ですが、最近その痣蟹が内地へ帰ってきているというじゃありませんか。こんどの殺人事件の手口が、たいへん惨酷なところから考えてあの痣蟹仙齋が始めた仕業だろうという者がありますぞ。こいつはどう

です」

「ふーむ、痣蟹仙齋か」課長は眉を顰めて呻った。「本庁でも、彼奴の帰国したことはチャンと知っている。こんどの事件に関係があるかどうか、そこまで言明の限りでないが、近いうち捕縛する手筈になっている」

と云つたが、大江山課長は十分痛いところをつかれたといった面持だった。痣蟹仙齋の、あの顔半分を蔽う蟹のような形の痣が目の前に浮んでくるようだった。

「それでは課長さん。これは新聞には書きませんが、痣蟹の在所は目星がついているのですね」

「もう五分間は過ぎた」と課長はスツクと椅子から立ちあがった。

「今日はここまで……」

課長が室を出てゆくと、記者連は大声をあげて露骨な意見の交換をはじめた。結局こんどの吸血事件と帰国した痣蟹仙斎のこととを結びつけて、本庁は空前の緊張を示しているが、実は痣蟹の手懸りなどが十分でなくて弱っているものらしいということになった。そしてこのことを今夜の夕刊にデカデカ書き立てることを申合せたのだった。

夕刊の鈴の音が喧やかましく街頭に響くころ、大江山課長はにがりきっていた。

「しようがないなア。こう書きたてては、痣蟹のやつ、いよいよ警戒して、地下に潜ちちまうだろう」

そこへ一人の刑事が入ってきた。

「課長さん。お手紙ですが……」

と茶色のハトロン紙で作った安っぽい封筒をさしだした。

課長は何気なくその封筒を開いて用箋をひろげたが、そこに書いてある簡単な文句を一読すると、異常な昂奮を見せて、たちまちサツと赭あかくなつたかと思うと、直ぐ逆に蒼あおくなつた。そこには次のような文句が認めしめたられてあつた。

「大江山捜査課長殿

啓けい。しばらくでしたネ。しばらく会わないうちに、貴下きかの眼が

力りきはすつかり曇つたようだ。日比谷公園の吸血屍体の犯人

を痣蟹しわざの仕業とみとめるなどとは何事だ。痣蟹は吸血なんて

いうケチな殺人はやらない。嘘だと思ったら、今夜十一時、銀座のキャバレー、エトワールへ来たれ。きつと得心とくしんのゆくものを見せてやる。必ず来れきた！

「痣蟹仙齋」

課長は駭おどろいて、手紙を持ってきた刑事を呼びもどした。誰がこのような手紙を持ってきたのかを訊ねたところ、受付に少年が現れてこれを置いていったということが分つたが、探してみてももう使いの少年の行方は知れなかつた。だがこれは痣蟹の手懸りになることだから、嚴探げんたんすることを命じた。そしてその奇怪な挑戦状を握って、総監のところへ駈つけた。

その夜のことである。

銀座随一の豪華版、キャバレー・エトワールは日頃に増してお客が立てこんでいた。客席は全部ふさがってしまったので、已むを得ず、太い柱の陰にはなるが五六ヶ所ほど補助の卓子や椅子を出したが、これも忽ちふさがってしまった。

酒盃のカチ合う音、酔いのまわった紳士の胴間声、それにジャズの喧噪な楽の音が交りただもう頭の中がワンワンいうのであった。

この喧噪の中に、室の一隅の卓子を占領していたのは大江山捜査課長をはじめ、手練の部下の一団に、それに特別に雁金検事も加わっていた。いずれも制服や帯剣を捨てて、瀟洒たる服装に客たちの目を眩ましていた。なお本庁きつての剛力刑事が、

あつちの壁ぎわ、こつちの柱の陰などに、給仕や酔客や掃除人に変装して、蟻も洩らさぬ警戒をつづけていた。かれ等一行の待ちかまえているものは、奇怪なる挑戦状の主、痣蟹仙齋の出現だった。痣蟹はいずこから現れて、何をしようとするのであろうか。

ところがその夜の客たちは、検察官一行とは違い、また別なものを待ちかまえていた。それは今夜十時四十分ごろに、このキャバレーに特別出演する竜宮劇場のプリ・マドンナ、赤星ジュリアを観たいためだった。ジュリアの舞踊と独唱とが、こんなに客を吸いよせたのであった。

夜はしだいに更ふけた。屋外そとを行く散歩者の姿もめつきり疎まばらとなり、キャバレーの中では酔いのまわった客の吐き出す声がだん

だん高くなつていった。時計は丁度十時四十五分、支配人が奥からでてきてジャズ音楽団の楽長に合図あいずをすると、柔かいブルースの曲が突然トランペットの勇ましい響に破られ、軽快な行進曲に変わった。素破すわこそといふので、客席から割れるような拍手が起つた。客席の灯火あかりがやや暗くなり、それと代つて天井から強烈なスポット・ライトが美しい円錐えんすいを描きながら降つて来た。

「うわーッ、赤星ジュリアだ！」

「われらのプリ・マドンナ、ジュリアのために乾杯だ！」

「うわーッ」

その声に迎えられて、真黒な帛地きぬじに銀色の裝飾をあしらつた夜会服を着た赤星ジュリアが、明るいスポット・ライトの中へ飛び

こむようにして現われた。

そこでジュリアの得意の独唱が始まった。客席はすっかり静まりかえって、ジュリアの鈴を転ばすような美しい歌声だけが、キヤバレーの高い天井を揺すった。

「どうもあの正面の円柱が影をつくっているあたりが気に入らなせんな」

と大江山捜査課長が隣席の雁金検事にソツと囁いた。

「そうですね。私はまた、顔を半分隠している客がないかと気をつけているのだが、見当りませんね。痣蟹は顔半面にある痣を何とかして隠して現われない限り、警官に見破られてしまいますからな」

「イヤそれなら、命令を出して十分注意させてあります」

ジュリアの独唱のいくつかが終つて、ちよつと休憩となつた。

嵐のような拍手を背にして彼女がひっこむと、客席はまた元の明るさにかえつて、ジャズが軽快な間奏楽を奏しはじめた。警官隊はホツとした。

「きようは貴下の御親友である名探偵青竜王は現われないのですか」

と大江山はたばこ莩たばこに火を点つけながら、雁金検事に尋ねた。

「さあ、どうですか。先生この頃なにか忙しいらしく、一向出てこないです。しかし今夜のことを知っていれば、どこかに来てるかも知れませんか」

覆面の名探偵は、検事の親友だった。覆面の下の素顔を知っているものは、少数の検察官に止まっていた。青竜王に云わせると、探偵は素顔を事件の依頼者の前でも犯人の前でも曝さらすことをなるべく避けるべきであるという。だから一度雑誌に出た彼の素顔の写真というのがあったが、あれももちろん他人の肖像だったのである。

再び、トランペットの勇ましい音が始まって、客席の灯火はまたもや薄くなった。いよいよこんどこそは、痣蟹が現れるだろう。

「もう十一時に五分前です」

課長は卓テーブル子子の下で、拳銃ピストルの安全装置を外した。

検察官一行の緊張を余所よそに、客席ではまた嵐のような拍手が起

つた。美しい光の円錐の中に、ジュリアを始め三人の舞姫たちが、  
絢爛けんらん目を奪うような扮装して登場したのであったから。カスタ  
ネットがカラカラと鳴りだした。一座の得意な出しもの「赤い苺  
の実」のメロデイが響いてくる。……

「こいつはいかんじやないですか。三人の女優が、みな覆面をし  
とる」

と雁金検事が隣席の大江山課長に囁いた。

「これは舞台でもこの通りやるんです。それに真逆まさか痣蟹がああ美  
しい女優に化けているとは思いませんが……」

「だが見給え。この夜の十一時という問題の時刻に、女優にしろ、  
あのような覆面が出てくるのはよくないと思いますよ。それにあ

の長い衣裳は、女優の頤と頸のあたりと、手首だけを出しているだけで、殆んど全身を包んでいますよ。よくない傾向です」

「じゃあ命じて女優の覆面を取らせませうか」

そういうった瞬間だった。予告なしに、突然室内の灯火あかりが一せいに消えて、真暗闇となった。客席からはワーツという叫びがあがった。そのとき出口の闇の中から、大きな声で唳どな鳴る者があつた。「皆さん、われ等は警官隊です、危険ですから、すぐに卓テーブル子の下に潜つて下さあい！」

その声が終るが早いか、叫きょうかん喚と共に卓子と椅子とがぶつかり、転つたりする音が喧しく響いた。

(なにかこれは大事件だ！)

客の酔いは一時に醒めてしまった。

すると、こんどは騒ぎを莫迦ばかにしたようにパーツと室内の電灯が煌々こうこうとついた。

室内の風景はすっかり変つていた。客の多くは卓子テーブルの下に潜りこみ、ただすっかり酔っぱらつて動けない連中が椅子の上にダラリとよりかかっていた。出口にはどこから現れたのか、武装した三十名ほどの警官隊がズラリと拳銃ピストルを擬ぎして鉄壁てつぺきのように並んでいる。

「頭を出すと危い！」

警官が注意した。

「あツはツはツはツ」

思いがけない高らかな 哄こう笑しょうが、円柱の影から聞えた。

素破すわ！ 雁金検事も大江山課長も、卓子を小楯こだてにとつて、無気

味な哄笑のする方を注視した。

正面の太い円柱の陰から、蝙蝠こうもりのようにヒラリと空虚な舞台

へ飛び出したものがあつた。皮革かわで作つたような、黄色い奇妙な

服を着た痩せこけた男だつた。グツと出口の警官隊を睨みつけた

その顔の醜怪さは、なにに喩たとえようもなかつた。左半面には物凄

い蟹の形の大痣がアリアリと認められた。ああ、遂に痣蟹が現れ

たのだ！

意外な犠ぎせい牲

待ちに待たれていた大胆不敵な挑戦状の主は、とうとう皆の前に姿を現わしたのだった。怪賊痣蟹は二た目と見られない醜悪な面をわざと隠そうともせず、キツと武装警官隊の方を睨にらみつけた。武装隊を指揮しているのは金こんごう剛部長だったが、ヌツクと立って部下に号令した。

「あの怪物がすこしでも動いたら、撃ち殺してしまえッ」  
痣蟹はそれを聴くと、薄い唇をギユツと曲げて冷笑した。そして突然、背後うしろに隠しもった彼の手慣れた武器をとりだした。それ

は恐るべき軽機関銃だった。彼が和蘭オランダにいたとき、その秘密武器工場に注文して特に作らせたという精巧なものだった。——その機関銃の銃口つつが、警官たちの胸元ねらを覗ねらった。

「急ぎ撃てッ」

武装隊長は咄嗟とっさに射撃号令をかけた。

ドドーン。ドドーン。

カタ、カタ、カタ、カタ。

どっちが先へ撃ち出したのか分らなかつた。忽たちまち室内の電灯はサツと消えて、暗黒となった。阿鼻叫喚あびきようかんの声、器物の壊れる音

——その中に嵐のように荒れ狂う銃声があつた。正面と出口ひらめとにあいたいじ相對峙して、パツパツパツと真紅な焰が物凄く閃ひらめいた。猛烈な

射撃戦が始まったのだ。

警官隊は銃丸たまを浴びながら、ひるまず屈せず、勇敢に闘った。前方に火竜が火を噴いているような真赤な火の塊の陰に痣蟹がいる筈だった。それを目標に、拳銃ピストルの弾丸たまの続くかぎり覗いうつた。ときどき警官たちは胸のあたりを丸太ン棒なぐで擲りつけられたように感じた。それは防弾衣に痣蟹の放った銃丸が命中したときのことだった。防弾チョッキがなかったら、彼等はどうの昔に、全身蜂の巣のように穴が明いてしまったであろう。

だが軽機関銃の偉力は素晴らしかった。物凄い速さで飛びだしてくる銃丸は、大部分防弾衣で防ぎとめられはしたものの、だんだんに防弾鋼の当たっていない肘ひじを掠かすめたり手首に流れ当たったりし

て、さすがの警官隊もすこしひるみ始めた。卓子テーブルの陰から、眼ばかり出してこの猛烈な暗黒中の射撃戦を凝視していた雁金検事や大江山捜査課長などの首脳部一行は、早くも味方の旗色の悪いのを見てとった。

「大江山君、この儘ままじゃあ危いぞ。警官隊に突撃しろと号令してはどうだ」

「突撃したいところですが、駄目です。卓子だの椅子だの人間だのが転がっていて、邪魔をしているから突撃できません」

「でもこのままでは……」と検事は悲痛な言葉をのんだ。

と、そのときだった。誰か、検事の腕をひっぱる者があった。

「雁金さん、雁金さん——」

「おう、誰だツ」

「落付いて下さいよ、僕です。分りませんか」

「ナニ……そういう声は」

と雁金検事は相手の男の腕をグイと握ってひきよせて、こごこえ低声で囁ささやいた。

「——青竜王だナ」

青竜王！ それはかねて雁金検事の親友として名の高い覆面探偵青竜王だったのである。どうしたわけか、このところ十日ほど、所在の不明だった探偵王だった。彼のところへやった通信が届いて、このキャバレーへやってきたものらしい。

青竜王は闇の中で雁金検事と何事かをこごこえ低声で囁きあつた。その

揚句、話がすんだと見えて、

「じゃ、しつかり頼むぞ」

という検事の激励の言葉とともに、青竜王はコソコソとまた闇の中に紛れこんでしまった。——検事はこんどは大江山課長を引きよせると、何かを耳打ちした。

「よろしい。命令しましょう」

課長はそういつて、卓子の陰から匍はいだした。彼は銃丸たまの中をくぐりぬけながら、力戦している警官隊の方へ進んでいった。

間もなく何か号令が発せられて、武装警官隊の射撃は更に猛烈になった。天井から何かガラガラと墜おちてくる物凄い音がした。

「前面まえを注視ましている！」

隊長が叫んでゐる——

と、正面に怪物のように火を吐いていた痣蟹の軽機関銃が、どうしたものが急に目標を変えた。ダダダダッと銃丸は天井に向けられ、シャンデリアに当たって、硝子の碎片がバラバラと墜ちてきた。

「おや？」と思う間もなく、ワツという悲鳴が聞えて、いままで呻りつづけていた機関銃の音がハタと停つた。そしてドサリという重い機械が床上に叩きつけられる音がした。——これは勇敢な青竜王が、ひそかに痣蟹の背後にまわり、機関銃を叩き落したのだった。痣蟹は正面から警察隊の猛射を受けていたので、その撃退に夢中になっていたところをやつつけられたのであった。しか

し本当は警官隊は猛射をしていたことに違いないけれど、天井ばかり撃つていたのであった。それは突入した青竜王に怪我をさせることなく、しかも痣蟹を牽制けんせいするためだった。すべては名探偵青竜王の策戦だったのである。

気味のわるい機関銃の響がハタと停った。警官隊の激しい銃声もいつの間にか熄やんでいた。暗黒の室内は、ほんの数秒であったが、一転して墓場のような静寂が訪れた。

「灯りを、灯りを……」

青竜王の唳鳴る声でした。

それツというので、室内の電灯スイッチをひねったが、カチリと音がただけで、電灯はつかなかった。警官たちは懐中電灯を

探ったが、いまの騒ぎのうちに壊れてしまったものが多かった。それでも二つ三つの光芒こうぼうが、暗黒の室内を慌あわただしく閃ひらめいたが、青竜王に近づいたと思う間もなく、ピシンと叩き消されてしまった。暗黒のなかには、物凄うない呻り声を交えて、不気味な格闘が行われていることだけが分った。

警官隊は、倒れた卓子や、逃にげ惑まどっているキャバレーの客たちを踏み越え掻き分けて、呻り声のする方へ近づいていった。が、また捲き起る混乱のために、その呻り声がどこかへ行ってしまうた。

「どこにいるのだ、青竜王！」

「青竜王、声を出して下さーい！」

雁金検事たちは、大声で探偵の名を呼んだが、その応答は聞こえなかった。

「オーイ皆、ちよつと静かにせんかッ」

大江山課長が破れ鐘わがねのような声で呶鳴った。

その声が皆の耳に達したものが、一座はシーンとした。

「オイ、青竜王、どこにいるのだッ」

検事は暗黒の中に再び呼んだ。――

だが、誰も応えるものはなかった。一同は闇の中に高く動悸どうきのうつ銘めいめい々の心臓を感じた。

(どうしたのだろうか?)

そのとき正面と思われる方向の闇の中から軽い口笛の音が聞え

でした。

「あたしの大好きな

真紅な苺の実

とうとう見付かった

おお——

あなたの胸の中……」

ああ、いま流行の『赤い苺の実』の歌だ。竜宮劇場のプリ・マドンナ赤星ジュリアの得意の歌だった。——

「こら、誰だ。——」と大江山課長は叫んだ。「こんなときに呑<sup>の</sup>気に口笛<sup>んき</sup>を吹く奴は、あとで厳罰に処するぞ」

呑気な口笛——と捜査課長は云ったけれど、それは決して呑気

とは響かなかつた。なぜなら口笛は、警官の制止の声にも応じないで、平然と吹き鳴っていた。墓場のような暗黒と静寂の中に……。

「こら、止めんか。止めないと——」

と大江山課長が火のようになって暗がりの中を進みいでたとき、  
呀あツという間もなく、足許に転がっている大きなものに突当り、  
イヤというほど足首をねじつた。その途端に、足許に転がっていたものが解けるようにムクムクと起き上つて、激しい怒声と共に格闘を始めたから、捜査課長は胆きもを潰つぶしてハツと後方うしろへ下つた。  
「青竜王はここにいるぞツ」と格闘の塊かたまりの中から思いがけない声が聞えた。

「なにッ」

「痣蟹を早く押おきえて——」

雁金検事はその声に活路を見出した。

「明りだ、明りだ。明りを早く持つてこい」出口の方から、やつと手てさげ提電灯が二つ三つ入つてきた。

「そつちだ、そつちだ」

すると正面の太い円柱のあたりで、ひどく物の衝突する音が聞えた。それから獣のような怒号が聞えた。

「捕とらえた捕えた。明りを早く早く」

それツというので、手提電灯が束になって飛んでいった。

「痣蟹、もう観念しろッ」

まだバタバタと格闘の音が聞えた。するとそのときどうした調子だったか、室内の電灯がパツと点いた。射撃戦に被害をのがれた半数ほどの電灯が一時に明るく点いた。——人々は悪夢から醒めたようにお互いの顔を見合わせた。

「瘧蟹はここにいますぞオ」

それは先刻さつきから、暗闇の中に響いていた青竜王の声に違いなかった。警官隊もキャバレーの客も、言いあわせたようにサツとその声のする方をふり向いた。おお、それこそ覆面の名探偵青竜王なのだ。

「とうとう掴つかえたかね」

と検事は悦よろこびの声をあげて、青竜王に近づいた。

「青竜王！」

人々はそこで始めて、覆面の名探偵を見たのであった。彼はスラリとした長身で、その骨組はまるでシェパードのようにひょうか剽悍へんに見えた。ただ彼はいつものように眼から下の半面を覆面し、烏打帽の下からギョロリと光る二つの眼だけを見せていた。

「さあこの柱の根元をはさまごらんなさい。ここに見えるのが痣蟹の左足です。またこつちに挟はさまっているのが彼の黄色い皮製の服です。

始め痣蟹は、人知れずこの仕掛けのある柱から忍び出たのですが、いま再びこの仕掛け柱へ飛びこんでここから逃げようとしたのが運の尽きで、自ら廻転柱に挟まれてしまったんです。もう大丈夫です」

なるほどこの円柱は廻転するらしく、合せ目あわめがあつた。そして根元に近く、黄色い皮服と、変な形の左足の靴とがピョンと食はみだしていた。

大江山捜査課長は飛びあがるほど悦んだ。

「さあ、早くあの足を持って、痣蟹を引張りだせ！」

と命令した。

多勢おおぜいの警官たちはワツとばかりに柱の方へ飛びつくと、痣蟹

の足を持ってエンヤエンヤと引張った。また別の警官は、黄色い皮服を引張った。——だが暫くすると、警官たちは云いあわせたように、呀あツと悲鳴をあげると、将棋しょうぎだおしに、後方うしろへひっくりかえった。そして彼等の頭上に、途中から切断した皮服と左の長

靴とがクルクルと廻ったかと思うと、ドツと下に落ちてきた。

「なアんだ、服と靴とだけじゃないか」

と捜査課長は叫んだ。

「ウーム」

と流石さすがの覆面探偵も呻った。痣蟹に一杯喰わされたという形であつた。

そのときであつた。警官の一人が、顔色をかえて、捜査課長の前にとんできた。

「た、大変です、課長さん、あの舞台横の柱の陰に、一人のお客が殺されています」

「なんだ、いまの機関銃か拳銃ピストルでやられたのだろう」

「そうじゃありません。その方の怪我人は片づけましたが、私の発見したそのお客の屍体は惨たらしく咽喉笛を喰い破られています。きつとこれは、例の吸血鬼にやられたんです。そうに違いありません」

「ナニ、吸血鬼にやられた死骸が発見されたというのか」

「そういえば、先刻暗闇の中で『赤い苺の実』の口笛を吹いていたものがあつた……」

人々は驚きのあまり顔を見合せるばかりだった。

果してこれは痣蟹の仕業だろうか。それなれば検察官や覆面探偵はまんまとここまで誘きだされたばかりでなく、吸血の屍体をもつて、拭つても拭い切れない侮辱を与えられたわけだった。

自分は吸血鬼でないという痣蟹の宣言が本当か、それとも今夜のこの惨劇が、皮肉な自白なのであろうか。

赤星ジュリアは無事に引きあげたろうか。覆面の名探偵青竜王は雪辱せつじよくの決意に燃えて、いかなる活躍を始めようとするのか。そのうちに、どこからともなく、あの「恐怖の口笛」が響いてくるような気配がする。

吸血鬼の正体は、そも何者ぞ！

怪しい凶面ずめん

大胆不敵の兇賊きようぞく 痣蟹あざがに 仙齋せんさいが隠れ柱の中に逃げこもうとするのを、素早く覆面探偵青竜王がムズと掴つかえたと思つたが、引張りだしてみると何のこと、痣蟹の左足の長靴と、そして洋服の裂けた一部とだけで痣蟹の身体はそこに見当らなかつたではないか。これには痣蟹就縛しゆうばくに大悦およろこびだつた雁金検事や大江山捜査課長をはじめ検察官一行は、網の中の大魚を逃がしたように落胆した。

しかし痣蟹はまだそんなに遠くには逃げていない筈だつた。総指揮官の雁金検事は透たしろぐ気色もなく直ちに現場附近の捜査を命じたのだつた。警官隊はキャバレー・エトワールの屋外と屋内、

それから痣蟹の逃げこんだ隠れ柱との三方に分れて、懸命の大捜査を始めたのだった。

「おお、青竜王は何処へいったのか」

と、雁金検事は始めて気がついた様子で左右を見廻わした。

「青竜王？」

検事につきそっていた首脳部の人たちも同じように左右を顧みかえりた。だが彼の姿はどこにも見えなかった。

「さつきまでその辺にいたんだが、見えませんよ」と大江山課長は云った。

「また何処かへとびだしていったんだらう」

「イヤ雁金検事どの」課長は改まった口調で呼びかけた。「貴官あなた

はあの青竜王のことをたいへん信用していらつしやるようですが、私はどうもそれが分りかねるんです」

と、暗に覆面探偵を疑っているらしいような口ぶりを示した。

「はッはッはッ。あの男なら大丈夫だよ」

「そうですかしら。——そう仰おっしゃ有るなら申しますが、さつき暗

闇の格闘中のことですが、いくら呼んでも返事をしなかつたですよ。そして唯、あの『赤い苺の実』の口笛が聞えてきました。それから暫くすると、急に青竜王の声で（痣蟹はここにいますぞオ）と喚わめきだしたではありませんか。その間かん、彼は何をしていたのでしよう。なにしろ暗闇の中です。何をしたつて分りやしません」

人殺しだつて出来るとも云いかねない課長の言葉つきだった。

「あれは君、青竜王のやつが痣蟹に組み敷かれていたんで、それで声が出せなかったのだろう。それをヤツと跳ねかえすことが出来て、それで始めて喚いたのだと思うよ」

「そうですかねえ。——第一私は青竜王のあの覆面が気に入らないのです。向こうも取ると都合が悪いのでしようが、私たちは捜査中気になって仕方ありません。あの覆面をとらない間、青竜王のやることは何ごとによらず信用ができないとさえ思っているのです」

「それは君、思いすぎだと思うネ」

と検事は困ったような顔をして大江山捜査課長の顔を見た。

「ですから私は——」と課長は勝手に先を喋しゃべった。「あの柱に服

の裂けた一片と靴とが挟まっていたが、あれは痣蟹が逃げこんだのではなくて、あらかじ予め痣蟹が用意しておいた二つを柱に挟んで、その中へ逃げたものと見せかけ、自分は覆面をして誰に見られても解るその痣を隠し、青竜王だと云っているかもしれないと思うのです」

「はッはッはッ。君は青竜王が覆面をとれば痣蟹だというのだネ。いやそれは面白い。はッはッはッ」

「私は何事でも、疑わしいものは証拠を見ないと安心しないのです。またそれで今日捜査課長の席を汚さないでいるんですから……」

「じゃ仕方がないよ。僕の身元引受けが役に立たぬと思つたら遠

慮なく彼の覆面を外してはずみたまえ、僕は一向構わないから」

「イヤそういうわけではありませんが……。しかし今夜はもう青竜王は出て来ませんよ。彼は逃げだせば、それでもう目的を達したんですから」

さすが流石は捜査課長だけあって、誰も考えつかないような疑点を示したのだった。だがそのときだった。例の隠れ柱が音もなくパツクリと口を開き、その中から飛びだしてきたのが誰であろう、覆面の探偵だったから、気の毒な次第だった。

「うむ——」

と捜査課長は驚きのあまり、思わず呻うなった。

青竜王は検事たちの姿をみつけると、ズカズカと走りよった。

「雁金さん。痣蟹の逃げ路が、とうとう分りましたよ。このキャバレーの縁えんの下を通つて、地階の物置の中へ抜けられるんです。そこからはすぐ表へとびだせます。貴方あなたの号令がうまくいっていないのか、その物置の前には警官が一名も立っていないので、うまく逃げられた形ですよ」

「ナニこの柱から物置へ抜けて、表へ逃げちまつたつて」

検事は肯うなずきながら大江山課長の方を向いて「そんな逃げ路のあることを何故前もつて調べておかなかつたのかネ、君。早速さつそくキャバレーの主人を呼んできたまえ」

「はア——」

課長は面目ない顔をして、部下にキャバレーの主人を引張つて

くすることを命じた。

間もなく、奥から身体の大きなキッチンとしたタキシードをつけた男が現れた。彼はどことなく日本人離れがしていた。それも道理だった。彼はオトロー・ポントスと名乗るギリシア人だったから。

「わたくし、ここの主人、オトローでございます。——」

西洋人の年齢はよくわからないが、見たところ三十を二つ三つ過ぎたと思われるオトロー・ポントスはニコやかに揉み手もをしなが  
ら、六尺に近い巨体をちよつと屈かがめて挨拶あいさつをした。

「君が主人かネ」と検事はすこし駭おどろきの色を示しながら「怪し  
らん構造物があるじゃないか。この円まる柱ばしらが二つに割れたり、  
それから中に階段があつたり、物置に抜けられたり、一体これは

如何なる目的かネ」

「それはわたくし、知りません。この仕掛はこの建物をわたくし買った前から有りました」

「ナニ前からこの仕掛があつた？ 誰から買ったのかネ」

「ブローカーから買いました。ブローカーの名前、控えてありますから、お知らせします」

「うむ、大江山君。そのブローカーを調べて、本当の持ち主をつきとめるんだ。——それはいいとして何故こんな抜け路をそのままにして置いたのかネ。何故痣蟹に知らせて、利用させたのだ」

「わたくし痣蟹と称ぶミスター北見仙齋を信用していました。

あの人、わたくし故国ギリシアから信用ある紹介状もつてきまし

た」

「ギリシアから紹介状をもつてきたつて。ほほう、痣蟹はギリシアに隠れていたんだな。イヤよろしい。君にはゆっくり話を聞くことにしよう。しかしもし痣蟹から電話でも手紙でも来たら、すぐ本庁へ知らせるのだ。いいかね。忘れてはいけない」

「よく分かりました」

そこでオトー・ポントスはまた恭しげうやうやに敬礼をして下ろうさがとしたとき、

「ああ、ちよつと待つて下さい」

と声を掛けた者があつた。それは先刻さつきから痣蟹の遺留いりゆうした品物をひねくりながら、この場の話に耳を傾けていた覆面探偵ふくめんたんてい

せいりゆうおう  
青竜王だった。

「ポントスさん。これは貴方のものではありませんかネ」

といつて、青竜王は何か小さい紙片しへんを見せた。キャバレーの主人はそれを手にとつてみたが、それは何か建築図の断片らしく、  
壁へき体たいだの階段かいだんだの奇妙な小室しょうしつだの符合が並んでいたが、  
生憎あいにくごく端はしの方はただけを切取つたものらしく、何を示してある図  
か、この断片だんぺんだけでは分らなかつた。

「これ、何ですか。とにかく、わたくしのでは有りません」

ポントスは腑ふに落ちぬ顔をして、紙片を青竜王に返した。

「もう一つ、お尋ねしますが、赤星ジュリアは昨夜ゆうべここへ来たのが始めてですか」

「いえ、たびたび来て、歌わせました。もう七、八回も頼みました」

「たいへん御鼻<sup>ごひいき</sup>頂のようですね」

「そうです。ジュリア歌う——お客さま悦びます。わたくしも悦びます。なかなかよい金<sup>かね</sup>儲<sup>もう</sup>けできますから、はッはッはッ」

ポントスは露骨な笑いを残して出てゆくと、大江山捜査課長は青竜王の腕をムズと捉<sup>とら</sup>えた。

「いまの建築図のようなものを出し給え。君はそれを何時<sup>いつ</sup>の間にもどこから手に入れたんだい」

青竜王は課長の手を静かに払いながら、

「これですか。これを御存知なかつたんですネ。なアに、痔蟹の

裂けた洋服の裏に縫いつけてあったんですよ」と事もなげに云うと、その紙片を恭しく差し出しながら「では確かに貴方様にお手渡しいたしますよ」

不可解なる紙片！ 一体それはいかなる秘密を物語るものであろうか。

消えた屍体<sup>したい</sup>

何のためか十日間あまり、事務所を留守にしていた青竜王は、

キャバレー・エトワール事件の次の日の昼ごろ、ブラリと探偵事務所に姿を現わしたのだった。覆面探偵の帰還きかん！

その気配けはいを知って、奥から飛ぶように出て来たのは勇敢な少年探偵勇だった。

「ああ。青竜王せんせい。——僕は今日きつと青竜王せんせいが帰って来ると思ってたんです」

と、相も変あいらず頭部にはピッタリ合った黒い頭巾ずきんを被かぶり、眼から下を三角帛さんかくぎぬで隠した覆面探偵を迎えたのだった。探偵は少年の肩を両手で優しく叩いた。

「昨夜は青竜王ゆうべ せんせい、素敵そてきでしたネ。だけど、もう僕たちを呼んで下さるかと思っていたのに、ちつとも呼んで下さらないので、ガッ

カリしちやった」

「勇君も大辻も来ていたのは知っていたが、昨夜の事件は危くて、手伝わせたくなかったのだよ」

「その代り僕は、いろいろなみやげばなし土産話を青竜王せんせいにあげるつもりで

すよ。昨夜ゆうべ舞台上で殺された男ネ、あれは竜宮劇場に毎日のよう

に通っていた小室静也こむろしずやという伊達男だておとこですよ。いつも舞台に一番

近いところにおいて、ジュリアが出ると誰よりも先にパチパチ拍手を送るイヤナ奴ですよ。あの男のことは、竜宮劇場のファンなら誰でも知っていますよ」

「ああ、そうだったのか。それはいいことを聞いた」

「あの伊達男小室の咽喉のどにあった凄すごい切傷も、この前、日比谷公

園で殺された学生の咽喉の傷も、どっちも同じことですね。つまりどっちも吸血鬼きゆうけつきがやったんですよ」

「うむ」と青竜王はちよつと眼を輝やかせたが、すぐ元の温和おとなしい彼に帰った。「そうだ、その日比谷公園の話を詳しく君にして貰おうかな」

そこで勇少年は、前日ぜんじつ黄昏たそがれの日比谷公園でみた惨劇さんげきについて知っていることをすべて語った。青龍王は曲まがったパイプで刻きざみ煙草たばこをうまそうに吸いながらじつとそれに耳を傾けていた。

「すると勇君の説によると、はじめ五月躑躅さつきの陰で恋人の少女と楽しく語っていた。その話半ばなかに、少女は何か用事ができて、学生を残したまま出ていった。吸血鬼は学生が独ひとりになったところ

を見澄<sup>みす</sup>まして、背後<sup>うしろ</sup>から咽喉を絞め、つづいて咽喉笛をザクリとやつて血を吸つたというのだネ」

「その通りですよ、青竜王<sup>せんせい</sup>」

「それから、その恋人の少女は現場へ帰つて来たかネ」

「いいえ」勇少年は頭を振つて「僕はそれを考えて、長いこと待つていたんだけど、とうとう帰つて来なかつたんです」

「それは可笑<sup>おか</sup>しいネ。今の話なら、必ず帰つて来る筈だと思つがネ。外に恋人らしい女は誰も通らなかつたのかい」

「ええ、そうですよ」と勇は応<sup>こた</sup>えたが、そのとき急に気がついた様子で「アツ、そういえば赤星ジュリアが近よつてきたことは来たんです。でもあの人は、自動車を通りかかつたんだといつてい

ましたよ。それから自動車の中から出て来なかつたけれど、ジュリアの友達やばせちどりの矢走千鳥もそば傍まできました。でもいくらなんでもこの二人が……」

「でもこの二人の外に誰も少女は帰って来なかつたんだろう。一応そこを考えてみなくちやいけない。それに先刻さつきの話では、四郎——イヤその学生の日記帳の数十頁ページが、いつの間にか破られていたというし……」

「そのことは大辻さんがたいへん怒っていますよ。どうしても二人に尋ねるんだといって、今日出かけていったんです」

「ジュリアの耳みみかさり飾かざり右の方のはチャンとしていたけれど、左のは石が見えなくて金環きんかんだけが耳みみたば朶ぼについていたというのは面

白い発見だネ」

「僕は耳飾から落ちた石が、もしや吸血鬼の潜んでいた草叢くさむらに落ちていないかと思つて探したんだけれど、見付からなかった。

それからジュリアの歩いたと思う場所をすっかり探してみたんだけれど、やはり見付からなかった。それでジュリアの耳飾の青い石は、あの辺で落したものだじゃないということが分つたんですよ。  
青竜王せんせい」

少年はそういつて、眼をパチパチ瞬まばたいた。青竜王はパイプから盛んに紫煙しえんを吸いつけていたが、やがて少年の方に向き直り、

「君は少年の屍体の辺もよく探してみたかネ」

「もちろん懐中電灯で探したんだけれど、何なんべん遍べんやつてみても見

つからなかつたんです」

「ほう、そうかネ」

少年は青竜王の顔をしげしげ見ていたが「まさか青竜王は赤星  
ジュリアたちを怪しんでいるのじゃないでしょうネ」

青竜王はそれに応えようともせず、いつまでも黙ってパイプを  
吸いつづけていた。

そのとき卓上電話のベルがリリリンと喧やかましく鳴り響いた。勇少  
年が受話器をとりあげて出てみると、向うは赤星ジュリアを尋ね  
ていった筈の大辻の声だった。

「ナニ丸ノ内で大騒ぎが始まったって？ 青竜王せんせいが帰っていられ

るから、いま代るから待っているんだよ」

と行って、受話器を譲った。

青竜王はうむうむと聴いていたが、やがて電話を切った。

「どうしたんです、青竜王」

「なアに、痣蟹が竜宮劇場の裏口を通っていたのを発見して、また警官隊と銃じゅうか火を交えたのだそうだ。痣蟹はとうとう逃げてしまったので、疲れつか儲もうけだ。しかし痣蟹は竜宮劇場の外を歩いていったのか、それとも中から出て来たのか分らないそうだ」

竜宮劇場というと、誰でもすぐジュリアを思いうかべる、やはりジュリアは事件に関係があるのだろうか。

「でも変ですね。痣蟹はあの恐ろしい横顔を知られずに、どうしてひるひなか昼日中歩いていられたのでしょうか」

「ウン痣蟹は田舎者のような恰好かっこうをして、トランクを肩にかついで、たくみに痣をかくしていたそうだ」

「なるほど、うまいことを考えたなア。はははは」

「大辻はジュリアに会って日記帳のことを聞いたが、あたしは知りませんといわれたそうだ、まずいネ」

青竜王は自室に入ると、それから夕方までグツスリと睡った。

夕飯ができた頃、勇少年がベルを押すと、青竜王は起き出してきた。依然いぜんたる覆面のため、顔色は窺うかがうよしもないが、動作は明かに元気づいてみえた。そして大辻も加わって久し振りで三人が揃って食卓についた。しかし探偵談は一切ぬきであった。それが青竜王の日頃のお達たっしであったから。——夕飯が済すむと、青竜王

は行先も云わずブラリと事務所を出ていった。

痣蟹はどこへ逃げてしまったろう。いま何処どこに隠れているのだろう。覆面探偵青竜王は戦慄せんりつすべき吸血鬼事件に對しいまや本格的に立ち向う気色きしよくをみせている。彼の行方ゆくえはいずれこの事件に關係のある方面であろうということは改あらためて謂いうまでもあるまい。だがその行先は暫しばらく秘中ひちゆうの秘として預あずかることとし、その夜よ更ふけ、大学の法医学教室に起つた怪事件について述べるのが順序であらう。

宏大な大学の構内は、森林に囲まれて静寂そのものであった。殊ふくろうにこれは夜更の十二時のことであつた。梟ふくろうがときどきホウホウ

と梢こすえに鳴いて、まるで墓場のように無気味であつた。木造もくぞうの背の  
高い古ぼけた各教室は、納骨堂が化けているようであつた。そ  
してどの窓も真暗であつた。ただ一つ、消し忘れたかのように、  
また魔物の眼玉のように、黄色い光が窓から洩もれている建物があ  
つた。それは法医学教室の解剖室かいぼうしつから洩れてくる光であつた。  
近づいてみても、カーテンが深く下ろしてあるので窓の中には  
なにがあるのやら、様子が分らなかつた。ただ森閑しんかんとした夜の  
幕を破つてときどきガチャリという金属の触ふれあう音が聞えた。  
その怪あやしい物音が、室内に今起りつつある光景をハッキリ物語つ  
ているのだつた。

そこは馬蹄形ばていがたの急な階段式机が何重にも高く聳そびえている教室

であつた。中央の大きな黒板に向いあつて、真白な解剖台がポツンと置かれてあつた。その傍にはもう一つ小さい台があつて、キラキラ光る大小さまざまなメスが並んでいた。解剖台の上には白はくろう

蟻くろうのような屍体が横たわっているが、身長から云つてどうやら少年のものらしい。それをかこんで二人の人物が、熱心に頭と頭とをつきあわさんばかりにしていた。一人は白い手術着を着て、メスだのはさみ鋏だのを取りあげ、屍体の咽喉部いんこうぶを切開せつかいしていた。もう一人は白はくめん面の青年で、形かたちのよい背広に身を包んでいた。この手術者は法医学教室のろうやま蟻山教授、白面の青年は西一郎と名乗る男だつた。そこまで云えば、台の上に載のつた屍体が、吸血鬼さいいなに苛さいまれた第一の犠牲者である西四郎のものだということが分るであ

ろう。

「どうも素人しろうとは功を急いでいかんネ」と蠟山教授がいった。

「やはりこうして咽喉から胸部きょうぶを切開して食道から気管までを取出し、端はしの方から充分注意して調べてゆかなけりや間違いが起る虞おそれがあるのだ。急がば廻ことわざれの諺どおりだて」

「時間のことは覚悟をしてきました。今夜は徹夜しても拝見はいけんします」

「うん。時刻はこれから午前二時ごろまでが一番油の乗るときだ。君の時刻の選択はよかったよ。しかしいくら弟の屍体かは知らぬが、君は熱心だねえ。もしここから上にあるものならば、必ず君の目的のものを発見してあげるから安心するがいい。イヤどうも

皮下脂肪が発達しているひかしぼうので、メスを使うのに骨が折れる。こんなことなら電気メスを持ってくるんだつた……」

といっているとき、ジジーンと、壁にかけてある大きなベルが鳴りひびいた。それはあまりに突然のことだったので、教授は、「ややッ——」

とその場に飛び上つたほどだった。

「何でしょう、いまごろ？」

「ハテナ誰か来たのかな。この夜更に変だなア」と教授は頭を傾げた。

そのとき、またベルがジジーンと、喧しく鳴った。

「ちよつと見て来よう」

と教授はメスを下に置くと、扉ドアをあけて廊下へ出ていった。廊下は長かった。漸ようやく入口のところへ出て、パツと電灯をつけた。

「誰だな。——」

と叫んだが、何の声もしない。

「誰だな。——」

そういつて硝子ガラス越しに、暗い外を透してみていた教授は、何におどろ駭いたか、

「呀あッ、これはいかん」といつてその場に尻餅しりもちをつくと、大声に西一郎を呼んだ。

その声はたしかに解剖室に聞えた筈だったけれど、西はどうしたのか、なかなか出て来なかった。蠟山教授は俄にわかに恐怖のドン

底に落ちて、急に口が出なくなつて、手足をバタバタするだけだつた。

「どうしたんです、先生！」

元気な声が奥から聞えると、やつと西一郎が駈けつけた。西にやつと聞えたらしい。

「いま怪しい奴が、その硝子のところからこつちを睨にらんだ。ピストルらしいものがキラリと光つた、と思つたら腰がぬけたようだ。どうも極きまりがわるいけれど……」

「ナニ怪しい奴ですつて？」

一郎は勇敢にも扉ドアのところへ出て、暗い戸外そとを窺うかがつた。しかし彼には別に何の怪しい者の姿も映らなかつた。教授はきつと何か

の幻影をみたのだらうということにして、彼は教授を抱き起して、肩に支えた。

「あツ、冷たい。君の手は濡れているじゃないかい。向うで手を洗ったのかネ」

「いえなに……」

「なぜ手を洗ったんだ。一体何をしていたんだ。法医学教室の神聖を犯すと承知しないよ」

一郎は口だけは達者な教授をしつかり担いで廊下を元の解剖室の方へ歩いていった。

「おや、変だぞ」と一郎は叫んだ。

「なにが変だ」と教授は一郎の胸倉をとったが「うん、これは

可笑しい。教室の灯あかりが消えている。君が消したのか」

「いえ、僕じゃありません。僕は消しません。これは変なことだらけだから、静かに行ってみましょう。声を出さんで下さい。いいですか」

二人は静かに戸口に近づいた。そしてじつと真黒な室内を覗きこんだ。二人はもうすこしで、呀ツと声をたてるころだった。

誰か分らぬが、解剖台の上を懐中電灯で照らしている者があった。が、それはすぐ消えて、室内はまた暗澹あんたんの中に沈んだ。その代り、なにか重いものを引擦ひきするようにゴソリゴソリという気味のわるい音がした。

一郎は教授に耳うちして、室内の電灯のスイッチの在所ありかを訊きい

た。それは室を入つたすぐの壁にとりつけてあるということだつた。彼は教授の留めるのも聞かず、勇躍飛んで出ると、スイッチを真暗の中に探つてパツと灯をつけた。たちまち室内は昼あざむを欺くように煌々たる光にみちた。

「呀ッ、怪しい奴がッ！」

見ると黒板の左手にあたる窓が開いて、そこに一人の男が片足かけて逃げだそうとしていた。

「待てッ！」

と声をかけると、かの怪漢はクルリと室内に向き直つた。ああ、その恐ろしい顔！ 左の頬の上にアリアリと大痣おおあざのような形の物が現れていた。

「ああ、彼奴だツ」

一郎はそう叫ぶと、なおも逸つて怪漢に飛びつこうとする蠟山教授の腰を圧さえて、教壇の陰にひきずりこんだ。

ダダーン。

轟然たる銃声が聞えたと思うよりも早く、ピューツと銃丸が二人の耳許を掠めて、廊下の奥の硝子窓をガチャーンと破壊した。一郎の措置がもう一秒遅かったとしたら、教授の額には孔があいていたかもしれぬ。

それから五分間——二人は鮑のように固くなって、教壇の陰に潜んでいた。もうよかろうというので恐る恐る頭をあげて窓の方をみると、窓は明け放しになったままで、もう怪漢の姿がなかつ

た。ホツと息をついた蠟山教授は、このとき眼を解剖台の上に移して愕然がくぜんとした。

「やられたツ。——屍体がなくなっている！」

なるほど、解剖台の上には屍体の覆布おおいがあるばかりで、さつきまで有った筈の屍体が影も形もなくなっていた。

「彼奴あいつが盗んでいったんですよ、ホラ御覧なさい」と一郎は床ゆかの上を指しながら「屍体を曳擦ひきすつていった跡が窓のところまでついていきますよ。屍体を窓から抛りほうだして置いて、それから彼奴が窓を乗越えて逃げたんです」

「うん、違くない。早く追い駆けてくれたまえ」

「もう駄目ですよ。逃げてしまつて……」

「何を云っているんだ。君の弟の屍体なんじゃないか」

「追いついても、ピストルで撃たれるのが落ちですよ。それよりも警視庁へ電話をかけましょう」

「君のような弱虫の若者には始めて会ったよ。駄目な奴だ」

教授はいつまでもブツブツ怒っていた。

昼間丸ノ内を徘徊していた痣蟹が、深更よふかけになつてなぜ屍体を盗んでいったのだろう。一郎はなぜ弟の屍体を追わなかったのだろう。果して彼は弱虫だったろうか。

麗うるわしき歌うた姫ひめ

その翌日のこと、西一郎はブラリと丸ノ内に姿を現わした。そして開演中の竜宮劇場の楽屋がくやへノコノコと入っていった。赤星ジュリアの主演する「赤い苺いちごの実み」が評判とみえて、真昼から観客はいっぱい詰めかけていた。いま丁度ちやうど、休憩時間であるが、散歩廊下にも喫煙室にも食堂にも、「赤い苺いちごの実み」の旋律メロデーを口笛や足調子で恍惚こうこうつとして追っている手合が充満じゆうまんしていた。これが流行とはいえ、実に恐るべき旋律であつた。

「まあ西さん、暫しばらくネ——」

とジュリアは一郎を快く迎えた。

「イヤ早速、僕のお願いを聞きとどけて下すつて有難うございます。これで僕も失業者の仲間から浮び上がることが出来ます」

一郎はジュリアに頼んで、レビュー団の座員見習として採用してもらうこととなつたのであつた。彼は長身の好男子だつたし、それに音楽にも素養があるし、タップ・ダンスはことに好きで多少の心得があつたので、この思い切つた就職をジュリアに頼んだわけだつた。日頃我儘な気性の彼女だつたが、弟を殺された一郎に同情したもののか、快くこの労をとつて支配人の承諾を得させたのであつた。

「あら、改まつてお礼を仰有られると困るわ。——だけど勉強していただきたいわ、あたしが紹介した、その名誉のためにもネ」

「ええ、僕は氣きまぐ紛れ者で困るんですが、芸の方はしつかりやるつもりですよ」

「頼母たのもしいわ。早くうまくなつて、あたしと組んで踊るようになっていたただきたいわ」

「まさか——」

と一郎は笑つたが、ジュリアの方はどうしたのか笑いもせず、夢見るような瞳をジツと一郎の面おもての上に濺そそいでいたが、暫くしてハツと吾れに帰つたらしく、始めてニツコリと頼笑ほほえんだ。

「ホ、ホ、ホ、ホ……」

一郎はジュリアの美しさを沁しみ々と見たしみような気がした。ただ美しいといつたのではない、悩なやましい美しさというのは正まさに

ジュリアの美しさのことだ。帝都に百万人のファンがあるというのも無理がなかった。一郎はいつか外国の名画集を繙ひもといていたことがあったが、その中にレオン・ペラウルの描いた「車に乗れるヴィーナス」という美しい絵のあったのを思い出した。それは波な間に一台の黄金こがねづくりの車があつて、その上に裸体らたいの美の女神ヴィーナスが髪をくしけずりながら艶えんぜん然ぜんと笑つていたのであつた。そのペラウルの描いたヴィーナスの悩なやましいまでの美しさを、この赤星ジュリアが持っているように感じた。それはどこか日本人ばなれのした異国風の美しさであつた。ジュリアという洋風ようふう好みこのの芸名がピッタリと似合う美しさを持つていた。

ジュリアは一郎のために受話器をとりあげて、支配人しちの許もとに電

話をかけた。だが生憎あいにく支配人は、用事があつてまだ劇場へ来ていないということだった。

「じやここでお待ちにならない」

「ええ、待たせていただきましょう。その間に僕はジュリアさんにお土産みやげをさしあげたいと思うんですが——」

といつて一郎はジュリアの顔を見た。

「お土産ですつて。まあ義理ぎり固がたいのネ。——一体なにを下さるの」  
「これですけれど——」

一郎はポケットから小さい紙箱かみばこをとりだして、ジュリアの前に置いた。

「あら、これは何ですの」

ジュリアは小箱をとって、蓋を明けた。そこには真まっしろ白わたな綿わたの蒲団ふとんを敷しいて、その上に青いエメラルドの宝石が一つ載のっていた。

「これはツ——」

ジュリアの顔からサツと血の気けがなくなった。彼女はバネ仕掛ドアけのように立ち上ると、入口のところへ飛んでいって、扉ドアに背を向けると、クルリと一郎を睨にらみつけた。

「あなたはあたしを……」

「ジュリアさん、誤解しちやいけません。まあまあ落着いて、こっちへ来て下さい」

一郎はジュリアを元の席に坐らせたが、美しい女王は昂こうふん奮ふんにふる慄ふるえていた。

「これは貴女あなたの耳飾りみみかざりから落ちた石でしょう。これは僕が拾って持っていたのです、警官や探偵などに知れると面倒めんどうな品物です。お土産として、貴女にお返しします」

ジュリアは一郎に悪意のないのを認めたらしく、急いで青い宝石てのひらを掌の中に握ってしまふと、激しい感情を圧おさえ切れなかつたものか、ワツと行って化粧机の上に泣き崩くずれた。それにしても一郎は落ちた耳飾の宝石を何時何処で拾つて来たのだろう。

「ジュリアさん。云つて聞かせて下さい。貴女は四郎と日比谷公園の五月躑躅さつきの陰で会つていたのでしょう」

「……」ジュリアは泣くのを停やめた。

「僕はそれを察しています。つまり耳飾りの落ちていた場所から

分つたのですが」

「これはどこに落ちていたのでしょうか」とジュリアは顔をあげて叫んだ。

「それは四郎の倒れていた草叢くさむらの中からです」

「嘘ですわ。あたしは随分ずいぶん探したんですけれど、見当りませんでしたわ」

「それが土の中に入っていたのですよ。多勢おおぜいの人の靴に踏まれて入ったものでしょう」

「まあ、そうでしたの。……よかったわ」

それはすべて一郎の嘘だった。本当をいえば、彼は昨夜ゆうべ、四郎の屍体からそれを発見したのだった。蠟山教授がベルの音を聞いて

て法医学教室の廊下へ出ていった隙に、一郎はかねて信じていたところを行つたのだった。彼は四郎の屍体の口腔を開かせ、その中に手をグツとさし入れると咽喉の方まで探ぐつてみたのが、果然手懸りがあつて、耳飾の宝石が出てきた。実は蠟山教授を煩わして食道や気管を切開し、その宝石の有無をしらべるつもりだつたけれど、怪しいベルの音を聞くと、早くも切迫した事態を悟り、荒療治ながら決行したところ、幸運にも宝石が指先にかかったのであつた。素人にしては、まことに水ぎわ立った上出来の芸当だった。後から闖入して屍体を奪つていった痣蟹をみすみす見逃がしたのも、彼がこの耳飾りの宝石を手に入れた後だったから、その上危険な追跡をひかえたのであろうとも

思われる。とにかくジュリアの耳飾の宝石は四郎の口腔から発見されたのだ。なぜそんなところに入っていたかは問題であるが、一郎がジュリアに発見の箇所をことさら偽いっわっているのは何故だろう。

「ジュリアさん。四郎は貴女に、誰からか恨うらみをうけているようなことを云っていませんでしたか」

これで見ると、一郎はやはり愛あいてい弟四郎を殺さつが害がいした犯人を探しだそうとしているものらしい。

「ああ、一郎さん」とジュリアは苦しそうに顔をあげ「あたし何もかも申しますわ。そして貴方の弟さんの日記帳から破ぺってきたページをおかえししますわ」

ジュリアは衣裳函いししょうばんこのなかから、引き裂さいた日記をとりだして、一郎に渡した。それは四郎が殺された日、大辻が始めに屍体の側で発見し、二度目に見たとき裂かれていた四郎の自筆じひつの日記に相そ違ちがなかつた。一郎はそれを貪むさぼるように読み下くだした。

「それをよく読んで下されば分るでしょうが、四郎さんとあたしとは、千葉ちねの海岸で知合つてから、お友達になつたんです。それは只の仲よしというだけで、あたしは恋をしていたんじやありませんのよ、どうかお間違まちがいのないように、ね。——その日も四郎さんはあたしに会いに来たんですわ。それで夕方になり、四郎さんと日比谷を散歩して、あの五月躑躅さつきつづきの陰でお話をしていたんですが、待たせてあつた、あたしの自動車の警笛けいてきが聞えたので、

ちよつと待つててネ、すぐ帰つてくるわといつて四郎さんを残したまま、日比谷の東門ひがしもんの方へ行つたんですの。そこで自動車を見つけたので、四郎さんも連れてゆくつもりで自動車で迎えにゆき、再び五月躑躅の陰へいつてみると、四郎さんが殺されていたのですのよ。あたしはハツとしたんですが、人気商売の悲しさにはぐずぐずしていると人に見つかつて大変なことになると思つたので、引返ひきかえそうとしましたが、その日四郎さんに見せて貰つた日記のなかにあたしのことが沢山書いてあつたものですから、これを残しておいてはいけないと思つて、いま差上げただけの頁を破つてきたんですわ。すると間もなく皆さんに見つかつてしまつたんです。それがすべてですわ」

「ああ、そうですか」と一郎は大きく肯きながら「では耳飾の寶石も、そのときに落したんですね。これも拾われては蒼蠅うるさいことになるから、後で探したというわけですね」

「仰おっしゃ有るとおりですわ。寶石のことは、楽屋へ入ってから気がついたんですの。随分探しましたわ。ほんとにあたし感謝しますわ。でもこのことは、誰にも云わないで下さいネ」

「ええ、大丈夫です。その代り、何か犯人らしいものを見なかったか、教えて下さい」

「犯人？ 犯人らしいものは、誰もみなかったわ——」

といっているところへ、電話がかかってきた。それは出てきた支配人が、直すぐ西一郎に会おうという電話だったのである。

それから一郎は、支配人の室に行った。ジュリアの口添えくちぞがあつたから、すべて好条件で話が纏まとつた。今日は見習かたがた「赤い苺の実」の三場ばばかりへ顔を出して貰いたいということになつた。そして大部屋おおべやの人たちに紹介してくれた。

一郎はそれを報告のために、ジュリアの部屋に行ったが、鍵がかかつていた。それも道理どうりで、ジュリアはいま舞台に出て喜歌劇きかげきを演じているところだった。舞台の横のカーテンの陰には批評家らしい男が二人、肩を重かさねんばかりにして、ジュリアの熱演に感心していた。

「ジュリアはたしかに百年に一人出るか出ないかという大天才だ。見給え、どうだい、あの熱情ねっじょうとうるおいとは……。今日はこ

とに素晴らしい出来栄できばえだ」

「僕も全く同感だ。どこからあの熱情が出てくるんだろう。ちよつと真似まね手がない。——」

「ジュリアには非常に調子のよい日というのがあるんだネ。今日なんか正にその日だ。見ていると恐こわい位くらいだ」

「そうだ。僕もそれを云いたいと思つていた。僕は毎日ジュリアを見ているが、調子のよい日というのをハッキリ覚えていよ。この一日に三日、それから今日の四日と……」

「よく覚えていゝるねえ」

「いやそれには覚えていゝるわけがあるんだ。それが不思議にも、あの吸血鬼きゆうけつきが出たという号ごう外がいや新聞が出た日なんだからネ」

「ははア、するとああいう事件が何かジユリアを刺戟しげきするのかなア。だが待ちたまえ、今日は何も吸血鬼が犠牲者ぎせいしやを出したという新聞記事を見なかつたぜ。はッはッ、とうとう君に一杯担いっぱいかつがれたらしい。はッはッはッ」

「はッはッはッ」

一郎は批評家に嫌悪けんおを催もよおしたのか、怒ったような顔をして、そこを去った。

あぎがに  
痣蟹あぎがにの  
空くうちゆうそう  
中ちゆうそう  
葬そう

丁度ちようどその頃、捜査本部では、雁金検事と大江山捜査課長とが六ヶ敷むつい顔をして向いあつていた。机の上には、青竜王が痣蟹むつの洋服の間から見付けた建築図の破片はへんが載のつていた。

「雁金さんはそう仰おつしや有るですが、どうしてもあの覆面探偵は怪しいですよ」と大江山はまたしても、青竜王排撃はいげきの火の手をあげているのであつた。「第一あの覆面がよろしくない。本ほん庁ちようの部下の間には猛烈な不平があります。このままあの覆面を許しておくということになると、統制とうせい上じよう由々ゆゆしき一大事が起るかもしれません」

「気にせんがいいよ。そうムキになるほどのことではない。たか

が私立探偵だ」

「いまも電話をかけましたが、青竜王は所在が不明です。その前は十日間も行方が分らなかった」

「まあいい。あれは悪いことの出来る人間じゃないよ」

「それから所在不明といえば、あの西一郎という男ですネ。彼奴は犠牲者の兄だというので心を許していましたが、イヤ相当な

ものですよ。彼奴は無職で家にブラブラしているかと思つと、ど

こかへ行つてしまつて、幾晩もかえつて来ない。留守番のばあや

は金を貰つていながら、気味わるがつています。昨夜もそうです。

蟬山教授を騙して、不明の目的のために四郎の屍体を解剖させて

いるうちに、怪漢を呼んで屍体を奪わせた。そのくせ当人は、

痣蟹が屍体を盗んでいったと称しています。あれは偽せの兄ですよ。本当の兄なら、屍体を取返そうと思って死力をつくして追駈けてゆきます」

「イヤあれは本当の兄だよ」

「私は随分部下や新聞記者の前を繕ってきたが、今日かぎりそれを止めて、本当の考えを発表します。第一今日はキャバレー・エトワールの事件で、青竜王のところのチンピラ小僧にうまうませしめられて、面白くないです」

といっているところへ、給仕が入ってきて、雁金検事に電話が来ていると伝えた。

「はアはア、私は雁金だが、——」

と電話に出てみると、向うは噂むごの噂うわの主ぬしの覆面の探偵青竜王からだった。

「今日何か新しい吸血鬼事件があつたでしょう」

「ほい、もう嗅かぎつけたか。あれは絶対秘密にして置いたつもりだが、実は——」

と、検事は大江山との今の話を忘れてしまったように、秘密事件について話しだした。それは今日昼ひるすこし前、例の事件について調べることがあつて迎むかえのために警官をキャバレー・エトワールへ振出ふりだしてみると、雇やといにん人は揃そろっているが、主人のオト・ポントスが行方不明であるという。そこでポントスの寝室しんしつを調べてみると、ベッドはたしかに人の寝ていた形跡けいせきがあるが、ポ

ントスは見えない。尚なおもよく調べると、床ゆかの上に人血じんけつの滾こぼれたのを拭いた跡が二三ヶ所ある。外ほかにもう一つ可笑おかしいことは、室内にはポータブルの蓄音器ちくおんきが掛け放しになっていたが、そこに掛けてあつたレコードというのがなんと赤星ジュリアの吹きこんだ「赤い苺の実」の歌だったという。いまもってポントスの行方ゆくえは分らない。――

その話をして、雁金検事は青竜王の意見をもとめたところ、彼は電話の向うで、チエツと舌打ちをして云った。

「雁金さん、ポントスは昨夜ゆうべから今日の昼頃までに殺されたんですよ」

「そう思ふかね。誰に殺された。――」

「もちろん吸血鬼に殺されたんですよ。屍体はその近所にある筈はずですよ。発見されないというのは可笑しいなア」

「やっぱり吸血鬼か。そうになると、これで三人目だ。これはいよいよ本格的の殺人鬼の登場だツ。——とところで君はいま何処にいるのだ。勇が探していたが、会ったかネ」

「場所はちよつと云えませんがネ。そうですか、勇君は何を云つていましたか。——」

と其処そこまでいったとき、何に駭おどろいたか、青龍王は電話の向うで、

「ウム、——」

と呻うなった。そして、

「検事さん、また後で——」

といて、電話はガチャリと切れた。

「午後四時十分。——」

と、検事は静かに時計を見た。すると待っていたように、大江山課長が声をかけた。

「青竜王のいるところが分りました。いま電話局で調べさせたいです。青竜王せんせい、いま竜宮劇場の中から電話を掛けたんです。私は青竜王に一応訊問じんもんするため、職権しよっけんをもって拘束こうそくをいたしますから……」

「午後四時十分。——」

と検事は大江山の言葉が聞えないかのように、静かに同じ言葉を繰り返した。

丁度そのすこし前、竜宮劇場の赤星ジュリアの室ではまるで何かの劇の一場面のような、世にも恐ろしい光景が演ぜられていた。

赤星ジュリアは喜歌劇に出演中だったが、彼女の持ち役であるなんかい南海の女神はその途中で演技が済み、あとは終幕が開くので彼女を除く一座は総出そうでの形となつて、ひとりジュリアは楽屋に帰ることができるのであつた。彼女は自室に入つて、女神の衣裳いしやうを外はずしにかかつた。いつもなら、矢走千鳥やばせちどりが手伝つてくれるのだが、彼女は臨時に終幕に持ち役ができて舞台に出ているので、ジュリアは自ら扮装ぶんそうを脱ぬぐほかなかつた。

彼女は五枚折りの大きな化粧鏡の前で、まず女王の冠かんむりを外はずした。それから腰を下ろすと下にしやが躡んで長い靴と靴下とをぬぎ始めた。

演技がすんで、靴下を脱ぎ、素足すあしになるときほど、快こころよいものはなかつた。彼女は透きとおるように白いしなやかな脛すねを静かに指先でマツサージをした。そして衣裳を脱ごうとして、再び立ち上つたその瞬間、不ふと凶室内に人の氣配を感じたので、ハツとなつて背うろ後を振りかへつた。

「静かにしろ。動くときつぞ。——」

氣がつかかなかつたけれど、いつの間に現れたか、一人の怪漢がジユリアを睨にらんでヌツクと立っていた。左手には古風な大型のピストルを持ち、その形ぎようそう相は阿修羅あしゆらのように物凄かつた。彼の片かたほほ頬には見るも恐ろしい蟹かにのような形をした黒痣くろあざがアリアリと浮きでていた。これこそ噂うわさに名の高い兇きようぞく賊あざがにせんさい痣蟹あざがにせんさい仙齋

であると知られた。

ジュリアはすこし蒼あおざめただけだ。さして驚く気色きしよくもなく、

化粧鏡をうしろにして、キツと痣蟹を見つめたが、朱唇しゆしんを開き、

「早く出て行ってよ。もう用事はない筈よ」

「うんにや、こっちはまだ大有りおおあだ」と憎々にくにくしげに頤あごをしゃく

り「貰もらいたいものを貰もらってゆかねば、日本へ帰かえってきた甲斐あひがねえや。——」

「男らしくもない。——」

「ヘン何とでも云え。まず第一におれの欲しいのはこれだ。——」

痣蟹はジリジリとジュリアに近づくと、彼女が頸くびにかけた大き

いメタルのついた頸飾りに手をかけ、ヤツと引きむしつた。糸が切れて、珠たまがバラバラと床の上に散つた。痣蟹はそれには気も止めず、メタルを掌てのひらにとつて器用にも片手でその裏を開いた。中からは何やら小さい文字を書きこんだ紙片がでてきた。痣蟹はニツコリと笑い、

「やっぱり俺のものになつたね。——」

「出ておゆき。ぐずぐずしていると人が来るよ」

「どっこい。もう一つ貰いたいものが残っているのだ。うぬツ——」

痣蟹はピストルを捨てると、猛虎もうこのように身を躍おどらせてジュリアに迫つた。その太い手首が、ジュリアの咽喉部いんこうぶをギユツと絞

めつけようとする。

「アレツ——」

と叫ぶ声の下に、化粧鏡がうしろにお圧されて窓硝子まどガラスに当り、ガラガラと物凄い音をたてて壊れた。

その途端とたんだった。入口の扉ドアをドンと蹴破つて、飛びこんで来た

一人の、青年——

「ああ、一郎さん、助けてエ——」

「くせもの曲者、なにをするかア、——」

青年は西一郎だった。彼はジュリアに返事をするいとま違もなく、彼に似合わしからぬ勇敢さをもつて、いきなり痣蟹うしろの背後から組みついた。

「なにを生意気な小僧め！」

痣蟹は落ちつき払って一郎を組みつかせていた。

「ジュリア、いまに思い知るぞオ」

という声の下に、彼はエイツと叫んで身体を振った。その鬼神きじんのような力に、元気な一郎だったが、たちまちどうと振りとばされてしまった。

「さあ皆で懸かかれ、警官隊も来ているから、大丈夫だ」と声を聞きつけて、応援隊が飛びこんで来た。痣蟹は警官隊と聞くと舌打ちをして、入口に殺さつ到した劇場の若者を押ししたおし、廊下へ飛び出した。アレヨアレヨという間に、階段から下へ降りようとしたが、下からは駆けつけた大江山課長等がワツと上ってきたのを見

ると、

「やッ」

と身を翻ひるがえしてそこに開いていた窓を破つて屋上へ逃げた。

「それ、逃のがすなッ」

一同はつづいて、屋上に飛び出した。痣蟹は巨大な体たいく軀に似合わず身軽に、あちこちと逃げ廻っていたが、とうとう一番高い塔の陰に姿を隠してしまった。

「さあ、三さん方ぽうから彼奴きやつを囲かこんでしまふのだ。それ、懸れッ」

大江山課長は鮮あざやかに号令を下した。が、そのとき塔の向うにフラフラ動いていた竜宮劇場専用の広告気球の綱が妙にブルブルふると震えたかと思うと、塔の上に痣蟹の姿が見えたと思う間もなく、

彼の身体はスルスルと宙に上っていった。

「呀あッ。痣蟹が気球の綱を切ったぞオ」

と誰かが叫んだが、もう遅かった。華はなやかな気球はみるみる虚空こくうにグングン舞いのぼり、それにぶら下る痣蟹の黒い姿はドンドン小さくなっていた。

「うん、生意なまいき気なことをやり居おった哩わい」と大江山捜査課長は天の一角を睨にらんでいたが「よオし、誰か羽田航空港はねだこうくうこうに電話をして、すぐに飛行機であるの気球を追駈おけさせるツ」と命令した。

一同はいつまでも空を見上げていた。

航空港からは、直ちに速力の速い旅客機と上昇力に富んだ練習機とが飛び上って、気球捜査に向ったという報告があった。それ

を聞いて一同は、広告気球の消え去った方角の空と羽田の空とを  
等とうぶん分に眺ながめながら、いつまでも立ちつくしていた。

大江山課長は、傍かたわらを向いて、誰にいうともなく独ひとり言ごとをいった。

「覆面探偵がたしかに来て居ると思つたのに向に見つからず、  
その代りに痣蟹を見つけたが、また取逃がしてしまった。この上  
はあすこで見掛けた西一郎を引張つてゆくことにしよう」

しかし課長が下に下りたときには、その西一郎の姿もなくなつ  
ていた。

パチノ墓穴ぼけつの惨劇さんげき

夜の幕が、帝都をすっかり包んでしまった頃、羽田航空港から本庁あてに報告が到着した。

「竜宮劇場の広告気球を探しましたが、生憎あいにく出発が遅かったので、三千メートルの高空まで昇ってみましたが、遂ついにに見つかりませんでした。そのうちに薄暗うすやみになって、すっかり視界を遮さへぎられてしまったのでやむなく下りてきました。まことに遺憾いかんです」

捜査本部に於おいても、それはたいへん遺憾なことであった。せつかく屋上に追いつめた痣蟹を逃がしてしまったことは惜おしかった。しかしいくら不死身ふじみの痣蟹でも、そんな高空に吹きとばされてし

まったのでは、とても無事に生還することは覚束おぼつかなかろうと思われた。結局けつきよくそれが痣蟹の空中葬であつたらうという者も出て来たので、本部はすこし明るくなった。

「吸血鬼事件も、これでお仕舞しまいになるでしょうな。どうも訳が分らないうちにお仕舞いになって、すこし惜しい気もするけれど」

それを聞いていた大江山捜査課長は、奮然ふんぜんとして卓テーブルを叩いた。

「吸血鬼事件が片づいても、まだ片づかぬものが沢山ある。帝都の安寧あんねい秩序ちつじよを保つたたもために、この際やるところまで極きまりをつけるのだ。ここで安心してしまふ者があつたら、承知しないぞ」

一座はその怒声どせいにシーンとなつた。

それから大江山課長は経験で叩きあげたキビキビさでもって、

捜査すべき当面の問題を一々数えあげたのだった。

「第一に、生死せいしのほども確かでないキャバレー・エトワールの主人オトー・ポントスを探しだすこと。第二に、痣蟹しがいの乗って逃げた竜宮劇場の気球がどこかに墜おちてくる筈だから、全国に手配して注意させること。それと同時に痣蟹しがいの屍しがい体が、気球と一緒に墜ちているか、それともその近所に墜ちているかもしれぬから注意すること。但ただし従じゅうらい来の経験によると四十八時間後には、気球は自然に降下してくるものであること。第三に、覆面探偵を見かけたらすぐ課長に報告すること。以上のことを行うについて、次のような人員配置にする。――」

といってその担当主任や係を指名した。一同は何なんでも彼かでも、

それを突きとめて、課長の賞讃しょうさんにあずかりたいものと考えた。

そんな物騒ぶっそうな話が我が身の上に懸けられているとも知らぬ覆

面探偵青竜王は、竜宮劇場屋上の捕物とりものをよそに、部下の勇少年

と電話で話をしていた。

「それで勇君が、ポントスの部屋の隠し戸棚かくとだなから発見した古文こもんじ

書よといふのはどんなものだネ」

「僕には判わからない外国の文字ばかりで、仕方がないから大辻さんに見せると、これがギリシヤ語だというのです。大辻さんは昔勉強したことがあるそうで、辞書をひきながらやつと読んでくれましたが、こういうことが書いてあるそうですよ。——明治二年

『ギリシヤ』人『パチノ』八十人ノ部下ト共ニ東京ニ来航シテ居

ヲ構エシガ、翌三年或ル疫病ノタメ部下ハ相ツギテ死シ今ハ『パチノ』独リトナリタレドモ、『パチノ』マタ病ミ、命数ナキヲ知リ自ラ特製ノ棺ヲ造リテ土中ニ下リテ死ス——それからもう一つの文書ぶんしょは比較的新しいものですが、これには——『パチノ』ノ墓穴ヒンピンハ頻々タル火災ト時代ノ推移ノタメニ詳カナラザルニ至リ、唯タダ『ギンザ』トイウ地名ヲ残スノミトハナレリ。マタ『パチノ』ガ『オスミ』と称スル日本婦人ト契リシガ、彼女ハ災害ニテ死シ、兩人ノ間ニ生レタル一子（姓不詳）ハ生死不明トナリタリ。ソレト共ニ『パチノ』ノ墓穴ニ関スル重要書類ハ紛失シ、只本国へ送リタル二三ノ通信ト『パチノ』ノ墓穴カクナイ廊内ノ建築図トヲ残スノミナリ——というのです。聞いてますか、青竜王せんせい」

「イヤ熱心に聴いているよ。それで分つた。キャバレーの主人ポントスも、本国からそのパチノの墓穴探しに来ているのだ。そのいっぽう一方、痣蟹もたまたまこの秘密を嗅かぎだして、本国で墓穴の建築図などを手に入れ、日本へ帰つて来たのだ。すべての秘密はそのパチノ墓穴に秘められているのだよ。パチノ墓穴の場所については、いささか存ぞんじよりがあるが、しかしパチノの遺族を捜し出すのはちよつと骨が折れるネ。しかし何なに事も墓穴の中に在ると思うよ。では勇君、——」

「待つて下さい。青竜王せんせいはいま何処どこにいますのです。これから何処へ行くのですか」

「僕のことなら、決して心配しないがいいよ。——」

そういつて青竜王は受話器をかけた。心配でたまらない勇少年は、電話局に問いあわせると、なんと不思議なことに、青竜王のかけた電話は、やはり竜宮劇場の中のものだった。彼は一体どこに姿を秘めているのだろう。

それから空しく二日の日が過ぎた。

事件は一向思うように解決しなかったが、その代り、新たな吸血鬼事件も起らなかつた。とうとう吸血鬼は滅ほろんだのであろうか。詳しく云うと七日の午後になって、痣蟹くわの乗つて逃げた気球が、箱根はこねの山林中に落ちていたのが発見された。しかし変なことに、その気球は枯れ葉の下から発見されたのであった。そして問題の痣蟹の死体はどこにも見当らなかつたという。——この報告に管

下の警察は一斉に痣蟹の屍体発見に活動を開始した。

同じくその夜のことであつた。赤星ジュリアの楽屋に西一郎が来合せているとき、どこからともなく電話がジュリアの許に懸つてきた。電話口へ出てみると、相手は覆面探偵の青竜王だといつた。

「青竜王ですつて。まあ、あたくしに何の御用ですの」とジュリアは訝いぶかつた。

すると電話の声は、痣蟹の気球が発見されたが、屍体の見当らないこと、それから夕暮に箱根の山下である湯元ゆもと附近の河原かわらで痣蟹らしい男が水を飲んで見かけた者のあること、そして念のために後から河原へ行つてみると、紙片かみきれが落ちていて、開い

てみると血書けっしょでもって「パチノ墓穴を征服」としたためであつたことを知らせた。

「パチノの墓穴を征服ですつて」とジュリアはひどく愕おどろいたらしく思わず声を高らげて問いかえした。

電話の声は、そうです、なんのことも分らないが、確かにパチノと書いてありますよ、と返辞へんじをして、その電話を切つた。ジュリアは倒れるように、安楽椅子あんらくいすに身を投げかけた。

西一郎は、電話の終るのを待ちかねていたように、ジュリアに云つた。

「青竜王本人が電話をかけて来たんですか」

「ええ、そうよ。——なぜ……」

「はッはッ、なんでもありませんけれど」

そういった一郎の態度には、明あきらかに動揺の色が見えたが、ジュリアは気がつかないようであった。

青竜王の懸けた電話とは違つて、本庁の方へは深更しんこうに及んでも「痣蟹ハイカイノ屍体ハ依然トシテ見当ラズ、マタ管下カンカニ痣蟹ラシキ人物ノ徘徊セルヲ発見セズ」という報告が入ってくるばかりで、大江山課長の癩かんしゃく癩すじの筋を刺戟するに役立つばかりだった。

その真夜中まよなか、時計が丁度ちやうど十二時をうつと間もなく、今は營業をやめて住む人もなく化物屋敷ばけものやしきのようになってしまったキャバレー・エトワールの地下室の方角にギーイと、堅かたい物の軋きしるような物音が聞えた。エトワールの表と裏とは、制服の警官が張り

こんでいるのだったけれど、この地底の小さい怪音は、彼等の耳に達するには余りに微かであった。一体誰がその怪しい音をたてたのだろう。

このとき若し地下室を覗いていた者があつたとしたら、隅に積んだ空樽の山がすこし変に振じれているのに気がついたであろう。いやもつと気をつけて見るなれば、その空樽を支えた壁体の隅が縦に裂けて、その割れ目に一つの黒影が滑りこんだのを認めることができただであらう。

そこは隠されたる秘密階段で、さらにまた深い地底へ続いていた。用心ぶかくソロソロと降りてゆく黒影の人物の手は休みなしに懐中電灯の光芒の周囲の壁体を照らしていた。そのうちにと

うした拍子かその反射光でもって顔面がパツと照らしだされたが、それを見ると、この黒影の人物は、かなりがっちりした骨組の巨人で、眼から下を黒い布でスツポリと覆い、頭には帽子の鍰を深く下げていた。覆面の怪漢——そういえば、これは例の問題男の青竜王と寸分ちがわぬ服装をつけていた。おお、いよいよ青竜王が乗りこんで来たのであろうか。

彼は静かに階段を下りていった。下はかなり広いらしい。江戸時代の隠し蔵というのはこんな構造ではなかったか。——下では何をしているのか、ときどきゴトリゴトリという物音が聞えるばかりで、いつまで経つても彼は出てこなかった。恐ろしい静寂、恐ろしい地底の一刻！

そのとき、どこかで微かに口笛の音がしたと思った。それは気のせいだったかも知れないと人は疑うたがったろう。しかしそれは確かに口笛に違いなかった。次第に明めい瞭りょうになる旋メロデー律。ああそれは赤星ジュリアの得意な「赤い苺の実」の旋律——しかしこの場合、なんとという恐ろしい口笛であつたらう。暗い壁が魔物のように、かの怪たまぎしい旋律を伴奏した。……と、突如——まったく突如として、魂切たまぎるような悲鳴が地底から響いて来た。

「きやーッ、う、う、う……」

しかし、それきりだった。悲鳴は一度きりで、再び聞えてこなかつた。

戦せんりつ慄りつすべき惨劇が、その地底で行われたのだった。その現げんじ

場<sup>よう</sup>へ行つてみよう。

これはまた何という無惨なことだ。——そこはもう行き止りらしい地底の小室<sup>こへや</sup>だった。一人の男が、虚空<sup>こくう</sup>をつかんでのけ反<sup>ぞ</sup>るように斃<sup>たお</sup>れている。その傍には大きな箱が抛<sup>ほう</sup>り出してある。蓋を明け放しだ。中から白いものがチラと覗いているが、よく見れば氣味の悪い骸<sup>がい</sup>骨<sup>こつ</sup>だった。そしてそのまわりには丸い金貨がキラキラと輝いている。金貨は地面にもバラバラと散乱している。その側<sup>そば</sup>には一片のひきちぎれた建築図が落ちてゐる。それは痣蟹<sup>せいせん</sup>の秘<sup>ひ</sup>蔵<sup>ぞう</sup>の凶面<sup>ずめん</sup>に違いなかつた。——それ等の凄<sup>せい</sup>惨<sup>さん</sup>な光景は、一つの懐中電灯でまざまざと照らし出されているのであつた。

懐中電灯は静かに動く。——そして函の陰へ隠れている斃<sup>へい</sup>死<sup>し</sup>

者の顔面を照らし出す。まず、目につくのは、鋭い刃物で抉つたような咽喉部の深い傷口——うん、やつぱりさつき口笛が聞えたとき、残虐きわまりなき吸血鬼が出たのだ。帽子は飛んでしまっているが、グツと剥きだした白眼の下を覆う黒い覆面の布。おお、これは先刻この地底へ下つていった黒影の人物だった。そして知っている人ならば、誰でもこれがいま都下に名高い覆面探偵青竜王だと云い当てたろう。ああ、青竜王は殺されたのだ。なぜこんな地底でムザムザと殺されてしまったのだらう。

「いいですか。この覆面を取ってみましょう」

闇の中から男の声がした。それは懐中電灯を持っている人物の声だらう。

光芒の中に、一本の腕がヌツと出てきた。それは屍体の覆面の方に伸び、黒い布を握った。ずるずると覆面は剥がれていった。そして果然その下から生色を失った一つの顔が出て来た。ああ、その顔、その顔、蟬のようなその顔の、その頬には醜い蟹の形をした痣が……

「おお、これは痣蟹仙齋……」

なんとということだ。覆面探偵というのは、痣蟹仙齋だったのか。しかし不思議だ。そんなことが有り得るだろうか。だがここに無惨なる最期を遂げているのは、正に兇賊痣蟹に違いなかった。「貴女は失踪中のポントスのことを云うが、しかし誰でも貴女の釈明を要求しますよ」

と懐中電灯の男はいう。どつかで聞いた声音こわねである。

「いいえ、あたしは犯人じゃありません。このジュリアは貴方の電話でうまく此処ここへ誘さそいだされたのです。陥わな穽なです、恐ろしい陥穽ななんです。ああ、あたし……」

と、よよと泣き崩れる声は、意外にも今を時めく、龍宮劇場のプリ・マドンナ、赤星ジュリアに違いなかつた。

それで解つた。ここはパチノの墓穴なのだ。この深夜しんや、一体何ごとが起つたというのであろう。ジュリアを責せめる男は誰人だれ？  
そして地底に現われた吸血鬼は、そも何処ひそに潜ひそめる？

## 生か死か、覆面探偵

帝都の暗黒界からは鬼神きしんのように恐れられている警視庁の大江山捜査課長は、その朝ひさかたぶりの快こころい目覚めめを迎むかえた。それは昨夜ゆうべの静かな雨のせいだった。それとも痣蟹仙齋せいかいが空くう中ちゆう葬そうになって既に四日を経へ、それで吸血鬼事件も片づくかと安心したせいだったかもしれない。——課長は寝衣ねまきのまま、縁えん側がわに立ち出でた。

「——手を腰に膝を半ば曲げイ、足の運動から、用意——始めツ！」

ラジオが叫ぶ「イチニニサン」の号令に合わせて、課長は巨体をブンと振って、ラジオ体操を始めた。彼は何とはなしに、子供のような楽しさと嬉しさとが肚はらの底からこみあげて来るのを感じた。

「よしッ！ この元気でもって、帝都市民の生活を脅おびやかすあらゆる悪漢どもを一掃いつそうしてやろう」

課長はその悪漢どもを叩きのめすような手付きで、オイチニニと体操を続けていった。しかしその楽しさも永くは続かなかつた。そこには大江山捜査課長の自信をドン底へつき落とすようなパチノ墓地ぼちの惨劇さんげきが控えていたのであった。昨夜さくや起つたそのパチノ墓地事件の知らせは、雁金検事からの電話となって、ジリジリと

喧しく鳴るベルが、課長のラジオ体操を無遠慮に中止させてしまった。

「お早ようございます。ええ、私は大江山ですが……」

「ああ、大江山君か」と向うでは雁金検事の叩きつけるような声があった。——御機嫌がよくないナ、「君の部下はみんな睡眠病に罹っているのかネ。もしそうなら、皆病院に入れちまって、憲兵隊の応援を申請しようと思うんだが……」

検事の言葉はいつに似合わず針のように鋭かった。

「え、え、一体どうしたのでしょうか。私はまだ何も知らないんですが……」

「知らない？ 知らないで済むと思うかね。すぐキャバレー・エ

トワールの地下に入ってパチノ墓地をけんぶん検分したまえ。その上でキャバレーの出入口を番をしていた警官たちをさつそく早速、伝染病研究所へ入院させるんだ。いいかね」

ガチャリと、電話は切れてしまった。こんなに検事が怒った例を、大江山は過去におい於て知らなかった。エトワールの張番がどうしたというのだろう。パチノ墓地というのは何のことだろうか？

彼は狐に鼻をつままれたような気持でしばら暫くはぼうぜん呆然としていたが、やがてハツとしやうき正気にかえって、急いで制服を身につけ短剣を下げると、門前に待たせてあつたほろがた幌型の自動車の中に転がりこむように飛び乗った。

「オイ大急ぎだ。銀座のキャバレー・エトワールへ。——十二分

以上かかると、貴様も病院ゆきだぞ！」

運転手は何故そんなことを云われたのか解せなかったが、病院へ入れられては溜らないと思つて、猛烈なスピードで車を飛ばした。

キャバレーには雁金検事が既に先着して、埃の白く積つたソファに腰を下ろし、盛んに「朝日」の吸殻を製造していた。そして大江山課長が顔を出すと、

「ああ大江山君、悦んでいいよ。僕たちはまた夕刊新聞に書き込まれて一段と有名になるよ。全く君の怠慢のお陰だ」

鬼課長はこれに応える言葉を持つていなかった。それで現場検分を申出でた。検事は点けたばかりの煙草を灰皿の中へ捨て

ながら、「儂は君が検分するときの顔を見たいと思つていたよ」と喚わめいたが、そこで急に声を落して、日頃の雁金検事らしい口調になり、「全く、君のために特別に作られた舞台のようなのだ。しかし先入主はあくまで排はいげき撃しなけりやいかん」

妙なことを云われると思いつつ、課長は雁金検事の先に立つて、地下の秘密の通路から、地底に下りていった。地底には無限の魅み惑わくありというが、その魅惑がよもやこのさんざんしら検べあげたキャバレーの地底にあらうとは思ひもつかかなかつたことであつた。――崩れかかつたような細い石造せきぞうの階段が尽きていよいよ例のパチノ墓穴に入ると、そこには急きゆう設せつの電灯が、煌こう々こうと輝いて金貨散らばる洞窟どうくつの隅から隅までを照らし、棺桶の中の骸骨がいこつ

も昨夜さくやそのまま、それから虚空こくうを掴つかんで絶命ぜつめいしている痣蟹仙齋の屍体もそのままだった。ただ昨夜ゆうべの場面に比べると、竜宮劇場のプリ・マドンナ、赤星ジュリアと、それに寄りそって懐中電灯を照らしていた疑問の男とが、居ないところが違っていた。

「やっぱりそうだ！」

と、大江山課長はその場へ飛びこむなり叫んだ。

「覆面探偵の青竜王は、やはり痣蟹だったのだ」と倒れている痣蟹仙齋の服装を指しながら「どうですか検事さん。覆面探偵が怪しいと申上げておいたことも、無駄ではなかったですネ」

「いいや、やっぱり無駄かも知れない。これは痣蟹の屍体とは認めるけれど、青竜王の屍体と認めるのにはまだ早い。……君のた

めに作られたような舞台だといったのは、実はこれなのだ。つまり青竜王の覆面を取れば痣蟹であるという誤あやまりが起るように用意されてある。……」

「では検事さんは、これを見ても、痣蟹が青竜王に化けていたとは信じないのでですか」

「それはもちろん信じる。しかし真の青竜王が痣蟹だったということとは別の問題だ」

といった検事は、痣蟹を青竜王とは信じない面持おももちだった。

「大江山君、その問題は後まわしとして、この痣蟹は、明らかに吸血鬼にやられているようだが、君はどう思うネ」

「ええ、確かに吸血鬼です。この抉りえぐとられたような頸くびもとの傷、

それから紫斑しはんが非常に薄いことからみても、恐ろしい吸血鬼の仕業わざに違いありません」

「すると、痣蟹しじが吸血鬼だという君のいつかの断定だんていは撤回てつかいするのだネ」

捜査課長は検事の面おもてを黙って見詰めていたが、しばらくして顔を近づけ、

「おつしやる通り、痣蟹しじが吸血鬼なら、こんな殺され方をする筈はずがありません。吸血鬼は外ほかの者だと思ひます」

「では撤回したネ。——すると本当の吸血鬼はどこひそに潜んでいるのだ。もちろん大江山君は、吸血鬼が覆面探偵・青竜王だとはいわないだろう」

「もちろんです。——実をいえば、私は最初吸血鬼は痣蟹に違いないと思ひ、次に青竜王かも知れぬと思つたんですが、両方とも違うことが分りました。外に怪しいと睨んでいるのは、最初の犠牲者四郎少年の兄だと名乗る、西一郎だけになるのですが……」

と、其処そこまで云つた課長は急に口を噤つぶんで、あたりを見廻わした。それは冒険小説に出てくる孤島ことうの洞窟のような実に異様な光景だつた。「このパチノ墓地とかが飛び出して来たのでは、見当もなにもつかなくなりましたよ。一体これはどうしたことですかな」

そこで雁金検事は、パチノ墓地について、既に記しるしたとおりの伝奇的な物語をして聞かせ、「つまりパチノは皇帝の命令をうけ、莫ばくだい大な財宝ざいほうを携たずえて、日本へ遠征してきたが、志半ばこころなかに

して不幸な死を遂げたというわけさ」

大江山課長は、あまりにも奇異なパチノ墓地の物語に、しばらくは耳を疑ったほどだったが、彼の足許に転がっている骸骨や金貨を見ると、それがハッキリ現実のことだと嘸みこめた。

「その物語にある莫大な財産というのは、僅かこればかりの滾れ残ったような金貨だの宝石なのでしうか」

と大江山課長は不審げに云った。

「そうだ、儂が来たときから、この通り荒らされているのだが、もちろん既に何者かが財宝を他へ移したのに違いない。そいつは吸血鬼か、それとも痣蟹の先生だかの、どつちかだろう」

「イヤまだ重大な嫌疑者があります」と大江山は叫んだ。

「誰のことかネ」

「それはこのキャバレーの主人オトー・ポントスです。あいつがやっていたのでしよう」

「ポントスはどこかに殺されているのじゃないか。いつか部屋に血が流れていたじゃないかネ」

「そうでした。でも私はあのときから別のことを考えていました。それが今ハッキリと思い当つたんですが、ポントスは殺されたように見せかけ、実はこの莫大な財産とともに何処かへ逐電ちくでんしてしまつたのじゃないでしょうか。悪い奴やつのよくやる手ですよ」

「そういう説もあるにはあるネ」

と雁金検事は、冷ひややかに云つた。大江山は検事の反対らしい面

持を眺めていたが、

「——それで検事さんは、この事件をどうして知られたのですか。それから今お話のパチノ墓地の物語などを……」

検事はそれを訊きかれるとニヤリと笑えみを浮べ、「それは今朝がた、もう死んだものと君が思っている青竜王が邸やしきへやって来て、  
詳くわしい話をしていったよ」

「なんですって、アノ青竜王が……」

大江山は検事の言葉が信じられないという面持だった。青竜王すなわち痣蟹は、そこに死んでいるではないか。

「そうだよ。彼は昨夜十二時さくや、ここへ忍びこんだそうだ。すると、例の恐怖の口笛を聞きつけた。これはいけないと思う途端に、お

そろしい悲鳴が聞えた。近づいてみると、痣蟹が自分の服装をして死んでいたというのだ」

「ああ青竜王！　するとこれは偽にせ物で、本物の方は、やっぱり生きていたのか」

大江山課長はそういつて、大きな吐息といきをついた。

ゴルフ場にて

大江山捜査課長は後を部下に委まかせて、一旦本庁へかえったが、

覆面探偵がまだ健在だと聞いて、立つても据つてもいられなかつた。なんとという恐ろしい相手だろう。彼は自分の部下の警戒線をドンドン破つて潜せん入にゆうし、それからパチノ墓地の秘密などをテキパキと調べてゆくことなど、実に鮮あざかだつた。雁金検事が彼の云うことを信用しているのもどつちかというところ、無理はなかつた。

「強敵きやうてきの覆面探偵よ？」

大江山は今や決死的覚悟を極きめた。このままでは、これから先、彼の後塵こうじんばかりを拜おがんでいなければならぬだろう。

「よオし、やるぞ！」と課長は思わず卓子テーブルをドンと叩いた。

「第一になすべきことはポントスの行方ゆくえを探しあてることだ。彼き奴やつが吸血鬼であるか、さもなければ吸血鬼を知っているに違ちがいな

い。覆面探偵の方はいずれ仮面をひつ剥いでやるが、彼からポントスのことやパチノ墓地のことを十分吐きださせた後からでも遅くはないであろう」

課長はポントスの行方に、彼の首をかけた。直ちに特別捜査隊を編成して、それに秘策を授けて出発させた。そして彼は勇を鼓して、単身、青竜王の探偵事務所を訪ねた。――

「青竜王は不在ですよ、課長さん」出て来た勇少年は気の毒そうな顔もせず、むき出しに答えた。

「何処へ行くといつて出掛けたのかネ」

「玉川の方です。骸骨のパチノとお澄という日本の女との間に出来た子供のことについて調べに行く」と云っていましたよ」

「なんだって？」課長は頭をイキナリ煉瓦れんがで殴なぐられたような気がした。一体青竜王はどこまで先まわりをして調べあげているのだろう。折角せつかく勇氣を出したものの、これでは到底とうてい太刀打ちたちうちが出来ないと思った。しかしまだ間に合うかも知れない。「その子供というのはポントスのことじゃないのかネ」

「ポントスは本当のギリシア人ですよ。あいつはパチノ墓地を探しに来て、その墓地の上だとは知らずに、あのキャバレーを開いていたのです」

「ポントスでなければ誰だい。それとも痣蟹かネ」

「痣蟹は日本人ですよ。青竜王が探しているのは混血児ですよ」  
混血児を探しに玉川へ行った——ということを聞きだした大江

山は、鬼の首でも取ったような気がした。これなら或いは分らぬこともあるまい。

大江山課長は玉川へ自動車を飛ばした。しかし玉川という地域は、人家こそ疎まばらであつたが、なにしろ広い土地のことだから、どこから調べてよいか見当がつかない。そこで彼は、なるべく混血児の出しゅつ没ぼつしそうなところはなにかと思つたので、秋晴あきばれの停留場の前に立つている土地の名所案内をズラリと眺めまわしたが、そこで目に留とまつたのは、「玉川ゴルフ場」という文字だつた。

ゴルフ場に混血児——はちよつと似つかわしいと思つた。彼は雁金検事に誘さそわれて、いささかゴルフを嗜たしなんだ。この秋晴れにゴルフは懐なつかしいスポーツであつたが、なんの因果いんがか、今日は懐しい

どころか、わざわざお苦しみのためにゴルフ場を覗のぞきに行かねばならないことを悲しんだ。

車を玉川ゴルフ場に走らせたまではよかつたけれど、クラブの玄関をくぐるなり、

「いよオ、大江山君。これはどうした風の吹きまわしだい」

と背中を叩く者があつた。ハツと思つて後をふりかえつてみると、そこには思いがけなくも、雁金検事がゴルフ・パンツを履いてニヤニヤ笑つていた。そればかりではない。検事の後には、彼のなしみ馴染みの顔がズラリと並んでいたので駭おどろいた。それは蠟山教授、西一郎、赤星ジュリア、矢走千鳥やばせちどりという面々で、これでは吸血鬼事件の関係者大会のようなものだった。ただ肝腎かんじんの覆面探偵青

竜王とキヤバレーの主人ポントスとが不足していたが、この二人もどこからか現れてきそうであった。

「ちようど丁度いい。一緒にホールを廻ろうじやないか」と検事は腕をとら捉えた。

「ぜひそう遊ばせな。——」とジュリアたちもすす薦めた。

結局大江山課長は、その仲間に入った。背広を着てきたので、恥をかかずに済すんだのは何よりだった。

最初の競技は二組に分れることになった。ジャンケンをする、第一組は雁金検事、蟬山教授に矢走千鳥、第二組は大江山と西一郎に赤星ジュリアと決まった。

まず第一組が球ボールをテイに置いては、一人一人クラブを振って打

ち出していった。それから五分ほど遅れて、第二組がテイの上に立った。

「課長さんのお相手をしようなどは、夢にも思っていないでしたわ」

とジュリアが笑った。

「課長さん——は競技の間云わないことにしましょうよ、お嬢さん」

「あら——ホホホホ」

大江山はすっかりいい気持になってしまった。——ジュリアが最初に打ち、次に大江山が打った。一番あとを西一郎が打つと、三人はキャデーを連れて、青い芝地の上をゾロゾロ球ボールの落ちた方

へ歩きだした。

「君たちに会おうとは思いがけなかった」

と、課長は一郎の方を向いて破顔はがんした。

「雁金さんのお誘いなんです。丁度ジュリア君も元気がないときだったんで、たいへんよかったですよ」と一郎が答えた。

「ほう、お嬢さんはどこか悪いのかネ」

「あら、嘘。——このとおり元気ですわよ」

といったが、第一の球はジュリアが一番成績が出なかった。

第二のティで球を打つと、ジュリアの球は横まがに曲つて、一時二人に離れた。

「オイ西君」と課長は冗談ともなくそつと連れささやに囁いた。「この

あたりに混血児はいないかネ」

「混血児で一番近いのは、アレですよ」と一郎はジュリアの方を指した。

「なにジュリアか」とハツとした風であつたが、「そう云われると、なるほどジュリアは混血児みたいなどころがあるが……私の云つているのは、この玉川附近にもう七十歳ぐらいになる混血児が住んでいるのを知らないかというのだ」

「そんなのは居ませんよ」

「いないというのかネ。君はハツキリ云うから愉快だ、何も知らない癖に……」

と独り合点の課長は、斜ならざる機嫌に見えた。しかし後に分

るようにこれらの会話は決して冗談ではなかった。それが持つ重大な意味が今課長に分つていたとしたら、彼はそんなに恵比寿えびすがお顔ばかりはしていられなかつたであろう。——ジュリアは球ボールをグリーンに入れて、二人の方へ手をさしあげた。

第三のコースでは、また三人が一緒になつて球を打つていった。「君たちはだいぶ仲がいいようだが、まだ私に媒なこうど酌を頼みに来ないネ」と課長は更に機嫌がよかつた。

「よして下さい。ジュリア君の人氣に障さわりますよ」と一郎が打ち消すのを、ジュリアは、

「あら、あたしは課長さんにぜひお願いしたいわ。でも一郎さんは、あたしがお嫌いなものよ。どうせあたしは独りぼっちで、地獄

へ墜ちてゆくのだわ——」

とジュリアはヒステリックに云って、ハンカチーフを鼻に当てた。彼女の打数はだすうはいよいよ荒れていった。

そんな風にして、コースを一巡じゆんした結果は、大江山がズバ抜けて成績がよく、ずっと落ちて普通の成績を示したのが蠟山教授と矢走千鳥で、雁金検事も西一郎も更に振わず、ジュリアに至っては荒れ切った悪成績だった。

「イヤ恐ろしい成績表だ。全く恐ろしい」

と雁金検事は首を振って一郎の顔をみた。

「全く、こんなに恐ろしく打てようとは、当人の方で面喰めんくらっているとですよ」

と大江山課長は自分のことが問題にされているんだと早合点はやがてんして、極きまり悪わるる氣げにいった。

「時間があれば、もつと廻まわりたいのだが……」

と検事が云ったが、凄すこい当りをみせた大江山も至極しごく同感どうかんだった。しかしジュリア達の出演時刻のこともあるので、時間が足りないから止やめにした。その代り検事と課長は練習場で、球ボールを憂かッ飛ばしに出ていった。ジュリアと千鳥とは、その間にクラブ館ハウスの奥にある噴泉浴ふんせんよくへ出かけた。蠟山教授と一郎とは、青々としたグリーンを眺められる休憩室の籐椅子とういすに腰を下ろして、紅茶を注文した。こうして六人の同勢は三方に別れた。

大江山課長は人気のない練習場でクラブを振りながら、雁金に

話しかけた。

「検事さん。今日の集りの真意しんいはどこにあるのですかなア」と先さき刻つきから聞きたかつたことを尋ねた。

「うん——」と雁金は振りかけたクラブを止めて、「儂わしにもよく分らぬが、これは青竜王の注文なのだ」

「えッ、青竜王の注文？」と課長はサツと青ざめた。

「彼はゲームの結果を知りたがっていた。さし当りあた、君の大当りなんか、何と行って彼が説明するだろうか。はッはッはッ」

外国の名探偵が、真犯人を探し出すために、嫌疑者けんぎしやを一室にあつめてトランプ競技をさせ、その勝負の模様によって判定したという話を聞いたことがあるが、青竜王はそれに似たことをやる

のではあるまいか。とにかく課長は憂鬱ゆううつになって、俄かに球ボールが飛ばなくなった。

「検事さん。青竜王は貴方がたにゴルフをさせて置いて、自分はこの玉川でパチノの遺族を探しているそうですが、御存知ですか」  
「そうかも知れないネ」

「では青竜王の居るところを御存知なんですネ。至急会いたいのです。教えて下さい」

「教えてくれたって？ 君が行って会えばいいじゃないか」

検事は妙な返事をした。課長は検事が機嫌そんを損じたのだと思つて、あとは口を噤つぶんだ。

丁度そのときだった。クラブ館ハウスの方で、俄かに人の立ち騒ぐ声

が聞えた。課長がふりかえると、クラブ館ハウスのボーイが大声で叫んだ。

「皆さん、早く来て下さい。御婦人が襲われていまーすッ」

御婦人？——検事と課長とはクラブを投げ捨て、クラブ館ハウスへ駆けつけた。

おそ  
襲おそわれた裸女らじよ

この突発事件が起ったところは、クラブ館ハウスの中の噴泉浴室ふんせんよくしつ

のあるところだった。

それより三十分ほど前、その婦人用の浴室の二つが契約された。もちろんそれは赤星ジュリアと矢走千鳥の二人が、汗にまみれた身体を噴泉で洗うためだった。当時この広い浴場は、二人の外に誰も使用を契約していなかった。

ジュリアは第四号室を、千鳥の方はその隣りの第五号室を借りた。その浴室は、こうしゅうでんわばこ公衆電話函を二つ並べたようになっていて、入口に近い仕切しきりの中で衣類を脱ぎ、その奥に入ると、白いタイルで張りつめた洗い場になっていて、栓せんをひねると天井からシャーツと温湯おんとうが滝たきのように降ってくるのであった。婦人たちのためには、セロファンで作った透明な袋があつて、これを頭から被かぶつ

てやれば、髪は湯に濡れずに済んだ。

二人はゴトゴトと音をさせながら、着物を脱いだ。

「お姉さま」と千鳥が隣室から呼んだ。

「なーに、千いちちゃん」

「あたし、何だか怖いわ。だってあまり静かなんですもの」

「おかしな人ネ。静かでいい気持じゃないの」

そういつてジュリアは奥に入ると、シャーツと白い噴泉を真白な裸身に浴びた。

「あの——お姉さま」と千鳥がトントンと間の板壁を叩いた。

「お姉さまが黙っていると、なんだか、独ほっちでいるようで怖

いのよ。あたし、お姉さまのところへ入っていつてはいけないこ

と？」

「あらいやだ。まあ早くお洗いなさいよ。——そう、いいことがあるわ。じゃあ、あたしがここで歌を唄ってあげるわ。世話の焼ける人ネ」

そういつてジュリアは千鳥のために、美しい口笛を吹きならしたのであった。その歌はいわずと知れた彼女の十八番おはこの「赤い苺の実」の歌だった。

千鳥もそれに力を得たか、騒ぐのをやめてシャーツと噴泉の栓をひねって、しなやかに伸びた四肢ししを洗いはじめた。

それから何分のちのことだったかよく分らないが、この噴泉浴室の中から、突如として魂消たまぎるような若い女の悲鳴が聞えた。そ

れは一人のようでもあり、二人のようでもあつた。と、途端とたんにガ  
チャーンといつて硝子ガラスの破れるわような凄じい音すさまがして、これには  
クラブ館ハウスの誰もがハツキリと変事へんじに気がついたのだつた。  
いつもは男子絶対禁制きんせいの婦人浴場だつたけれど、誰だれ彼の差  
別なく、入口から雪崩なだれこんだ。

「どうしましたッ」

と真ま先まさきに入つたのは、クラブの事務長の大杉おおすぎだつた。しか  
し内部からはウンともスンとも返事がなかつた。

彼は手前てまへにある四番浴室をサツと開いた。そこにはジュリアの  
衣服が脱ぎ放はなしになつてゐた。ノックをして奥の仕切を押し開い  
たが、どうしたものかジュリアが居ない。噴泉はシャーツと勢い

よく出ていた。

彼は直ぐそこを飛び出すと、次の五番浴室にちんにゆう闖入した。そこには派手な千鳥の衣類が花を蒔まいたように床ゆかうえ上に散乱さんらんしていた。格闘があつたのに違いない。事務長はそこで胸を躍らせながら、奥の仕切をサツと開いた。

「呀あッ！」

と叫ぶなり、彼は慌てて仕切を閉じた。彼は見るに忍びないものを見たのだ。そこには一糸も纏まとわないジュリアが、大理石彫りだいらいせきぼの寝像であるかのように、あられもない姿をしてタイルの上に倒れていたのであつた。

「オイ、退どいた退どいた」

と背後に大きな声がした。雁金検事と大江山捜査課長とが入ってきたのだ。

噴泉を止め、ジュリアを抱き起すと、彼女は失心しっしんからやつと気がついた。

「どうしたのです。そして千鳥さんは……」

「ああ、千ちいちゃんは、……」とジュリアは白い腕を頭の方に向けて何か考えているようだったが、

「——誰かが攫さらつて……」といって入口の方を指ゆびさしたと思うと、ガツクリと頭を垂たれた。ジュリアはまた失心してしまったのだった。

「ナニ、千鳥さんは攫さらわれたというのか」

課長はジュリアを検事に預けて、自分は浴室を飛びだした。見ると正面の窓硝子が上に開いて、しかも硝子が壊れている。さっきの酷い音はこれだったのだ。怪人物は千鳥を奪って、此処から逃げたのに違いない。

彼はヒラリと窓を飛び越して、外へ出た。

そしてあたりを見廻わしたが、クラブの囲いの外は、茫茫々た

る草原が見えるばかりで、怪人物の姿は何処にも見えなかった。

ただ遙か向うを、濛々たる砂塵が移動してゆくのが目に入った。

「ああ、あれだツ。自動車で逃げたナ」

彼は玄関に廻ってみると、そこで連れて来た運転手とバツタリ出会った。

「課長さん。自動車を盗まれてしまいました」

と運転手は青くなつて云つた。

後には自動車が一台もなかった。だから向うを怪人物が裸身の矢走千鳥を乗せたまま逃げてゆくのを望みながらも、何の追跡する方法もなかった。

「そうだ、電話をかけよう」

事務室に飛びこんだ課長は、まどろこしい郊外電話に痼癩かんしやくだ

玉まを爆発させながら、それでも漸く警察署を呼び出し、自動車

取押え方とりおさかたの手配をするともに、また至急しきゆう自動車をゴルフ場

へ廻すように頼んだ。そして検事の待つている方へ歩いていった。

ジュリアは事務室の中で、急きゆうご拵ごしらえのベッドの上に寝かされ

ていた。枕頭ちんとうには医学博士蠟山教授が法医学とは勝手ちがいがら何くれとなく世話をしていた。雁金検事は腕こまねを拱こまねいて沈思ちんししていたが、課長の入ってくるのを見るなり、

「矢走嬢じょうは見つかつたかネ」

と聞いた。課長は一伍一什いちぶしじゅうを報告して、見失つたのを残念が  
つた。

「ジュリアさんは、何か話をしましたか」

と課長の問うのに対し、検事は搔かい摘つまんで話をした。——ジュリアの話によると、彼女は噴泉を浴びているうちに、隣室の千鳥が只ならぬ悲鳴をあげたので、愕おどろいて隣室へ飛びこんでみると、どこから入ったか、一人の怪漢が千鳥を襲おつていたので、背後うしろか

ら組みついたところ、忽ちたちま振り倒されて気を失った。気がついたら、こんなところに寝ていたというのであつた。

「その怪漢の顔とか、服装には記憶がありませんか」

「咄嗟とつさの出来ごとで、何も分らないそうだ。背後うしろから組みついたので、顔も見えないというのだよ」

そのときジュリアは目をパツチリ明いて、もう大丈夫だから、竜宮劇場の出場に間に合うよう帰りたい。西一郎を呼んでくれるようにと云つた。

「ああ、西一郎。彼はどこへ行つたんです」

「一郎君が見えないネ。——」

と不審ふしんをうっているところへ、扉ドアが明いて、彼がヌツと入つて

来た。

「オイ君はこの騒ぎの中、どこにいたのだい」

と課長は目を光らせていった。

「ちよつと外へ出て、畠を見ていたのです。都会人はこんなときでなければ、野菜の生えているところなんか見られませんよ」と云つたけれど、何だかわざとらしい弁解のように聞えた。

ジュリアは西の声を聞くと、一層いっそう帰りたがった。そこで西のほか外に検事が附添つて帰ることになり、大江山課長と蠟山教授は残ることになった。丁度警察から差し廻しの自動車が出来たので、三人は直ぐ東京へ出発することが出来た。

「どうも西という男は曲くせもの者だて」と、蠟山教授は頭を大きく左

右へ振った。

「まさか西一郎が、千鳥を襲撃したのじやあるまいな」と課長はひとごとひとり言をいった。

「それは何とも云えぬ。——」

といっているところへ、警笛けいてきをプーツと吹き鳴らしつつ、紛失した大江山の自動車が帰って来た。課長は愕いて玄関へ走りだしたが、中からは意外にも、彼の連れていた運転手の怪訝けげんな顔が現れた。

「自動車がございました。二百メートルばかり向うの畠の中に自動車の屋根のようなものが見えるので行ってみました。すると、愕いたことに、これが乗り捨ててあったのです」

「フーン」

と大江山は呻うなった。一体何者の仕業しわざか。西一郎がやったのか、それとも例のポントスが現れたのか、或いはまたその辺を徘徊はいかいしている筈の覆面探偵の仕業か。——一方、矢走千鳥は天に駆かけたか地に潜もぐったか、杳ようとして消息が入らなかつた。

だが、矢走千鳥は無事に生きていた。彼女は多摩川たまがわを眼下がんかに見下ろす、某病院の隔離かくりび病室びょうしつのベッドの上で、院長の手厚かい介かい抱いほうをうけていた。

「もう大丈夫です。静かにしていれば、二三日で癒なおります。身体にはどこにも傷がついていません。ただ駭おどろきが大きかったので、すこし心臓が弱っています。あまり昂奮しないのがよろしい」

「あたくし、誰かに逢いたいのですが」

「イヤ尤もつとです。そのうち誰方どなたが見えましよう」

そんな会話が繰返くりかえされているうちに、夜更よふけとなった。このとき病院の玄関に、一人の男が訪れた。院長の許可が出て、上へあげられた彼は、矢走千鳥の病室に通った。

「まあ、西さん。——よく来て下すつたのネ」

西はただニコニコ笑うだけだった。

「誰も来て下さらないので、悲しんでいたところですよ」

「僕は、ソノ青竜王から行って来るように頼まれたんです。当分ほか外に誰も来ないでしょう。院長から許しが出るまで、一歩も寝台の上から降りないことですネ」

「ええ、貴方が仰おつしや有ることなら、あたくし何でも守りますわ。

……ねえ、西さん」

「なんです、千鳥さん」

「あたくし、貴下あなたに、どんなにか感謝していますのよ。お分りになつて……」

「感謝？——僕は何にもしませんよ。ああ、助けられたことですか。あれなら青竜王に感謝して下さい。……イヤ、そんなことを今考えるのは身体さわに障りますよ。何しばらうごとも暫くは忘れていることです。誰かが聞いても、何にも喋しゃべってはいけません。千鳥さんは当分、生いける屍しかばねになつていなくちやいけないですよ、いいですか」

「生ける屍——貴下の仰有ることなら、屍になっていきますわ」といつてニツコリ微笑んだが、攫さらわれた千鳥は一体何を感謝しているのだろう。

### 覆面探偵の危難きなん

やばせちどり  
矢走千鳥の誘拐事件ゆうかいじけんは、なんの手懸りてがかもなく、それから一日過ぎた。

雁金検事はそのことで、大江山捜査課長を検事局の一室に招い

た。

「君の怠慢にますます感謝するよ。いよいよ儂<sup>わし</sup>たちは新聞の社会面でレコード破りの人気者となったよ。第一千鳥の神隱<sup>かみがく</sup>しはどうなつたんだ。玉川ゴルフ場から十分ぐらいの半徑<sup>はんけい</sup>の中なら、一軒一軒当つていっても多寡<sup>たか</sup>が知れているではないか。どうして分らぬのか、分らんでいる方が六ヶ敷<sup>むっし</sup>いと思うが……」

「イヤそれが不思議にも、どうしても分らないのです。ひよつとすると、犯人は夜のうちに千鳥をもつと遠いところに移したかもしれないのです。しかし御安心下さい。あの犯人も吸血鬼も、同一人物だと睨<sup>にら</sup>んでいて、別途<sup>べつと</sup>から犯人を探しています」

「別途<sup>べつと</sup>からというと、君の覬<sup>ねら</sup>つている犯人というのは誰だい」

「Pontos——つまりキャバレーの失踪した主人ですネ。部下は懸命に捜索に当たっています。今こんみようにちじゆう明日中にきつと発見してみせますから」

「彼奴きやつはもう死んでいるのじゃないか」

「死んでいてもいいのです。Pontosの持っている秘密が、恐怖の口笛にまつわる吸血鬼事件の最後の鍵なんです」

「ほほう」と検事は目を丸くして「では儂が首を縊くくらん前に、事件の真相を報告するようにしてくれ給たまえ」

大江山が帰ると間もなく、覆面探偵から電話がかかって来た。

「雁金さん。いよいよ犯人を決定するときが来ましたよ」

「ほほう。イヤこれは盛さかんなことだ」

「まぜかえしてはいけませんよ。それで一つ、お願いがあるのですけれど……」

「犯人を国外に逃がす相談なら、今からお断りだ」  
ことわ

「そうではありません。実は今夜、たしかに吸血鬼と思われる怪物から会見を申込みれているのです」

「うん、それはお誂え向きだ。あつちむでは新選組しんせんぐみを百名ばかり貸そうかネ」

「いえ、向うでは僕一人が会うという条件で申込んで来ているのです」

「そんな勝手な条件なんか、蹂躪じゆうりんしたまえ」

「そうはいかないですよ。——で僕は独りひとで会うつもりなんです

が、もし今夜九時までには、僕が貴下あなたのところへお電話しなかったら、貴下の一番下のひきだしの中に入っている手紙をよんで下さい」

「なんだ、手紙が入っているんだって？」なるほど誰がいつの間に入れたか、白い四角な封筒が入っていた。「あつたあつた。こんなもの直ぐ明すけられるじゃないか」

「明けても駄目です。或る仕掛がしてあるので、今夜九時にならないと、文字が出て来ません。今御覧ごらんになっても白紙はくしですよ」

チエツと雁金検事が舌打ちをした途端とたんに、相手の受話機がガチャリと掛った。

その日の夕刻、丁度黄昏たそがれどきのこと、丸ノ内にある化物ビル

といわれる廃墟はいきよになつてゐる九階建てのビルディングの、その九階の一室で、前代未聞ぜんだいまもんの奇妙な会見が行われていた。

まずその荒れはてた部屋の真中には足の曲つた一脚の卓子テーブルがあり、それを挿はさんで二人の人物が相対あいたいしていた。

入口に遠い方まぎにいる人物は紛れもなく覆面探偵の青竜王だったが、彼は椅子に腰をかけた儘まま、身体を椅子ごと太い麻繩あさなわでグルグルに締められていた。それに対する人物は、卓子を距へだてて立っていたが、その人物は頭の上から黒い布きれをスツポリ被かぶつていた。そして右手には鋭い薄刃うすばのナイフを構かまえて、イザといえは飛び掛ろうという勢いきおいを示していた。——これが雁金検事に報告された青竜王と吸血鬼との会見なのであつた。すると、黒い布を被つた

人物こそ、恐るべき殺人犯の吸血鬼なのであろう。

「案外智恵のない男だねえ——」と黒布の人物は皺枯れ声しわがでいった。皺枯れ声だったけれども、確かに女性の声に紛れもなかった。

「……」青竜王は無言で、石のように動かない。

「そうやって椅子に縛りつけられりや、生かそうと殺そうと、私の自由だよ。この短刀で、心臓をグサリと突くことも出来るし、お好みなら、指一本一本切ってもいい。苦しむのが恐ろしいのなら、ここにある注射針で一本プスリとモルヒネを打ってあげてもいいよ」と憎々にくにくしげに云った。

「約束を違たがえるなんて、卑怯ひきようだね、君は」と青竜王は始めて口を開いた。

「お前は莫迦ばかだよ。——妾わたしの正体を知っている奴は、皆殺してしまふのだ。お前を今まで助けてやったのを有難いと思え。しかし今日という今日は、気の毒ながら生きては外へ出さないよ」

と、まるで芝居がかりの妖婆ようばのような口調でいった。そして短刀を擬ぎしてジリジリと青竜王の方へ近づいてくるのであった。

「まあ待ち給え。何時でも殺されよう。だがその前に約束だけは果させてくれ。というのは、僕は君に云いたいことがあるんだ」

「云いたいことがある。有るなら最期の贈り物に聞いてやろう。但し五分間限りだよ。早く云いな——」

「僕はこれまで、かなり君を庇かばってきてやったぞ。君は知らないことはないだろう。最近に玉川で矢走千鳥を襲ったのも君だった。

僕が出て行って君を離したが。そのお陰で、君は吸血の罪を一回だけ重ねないで済んだのだ。いや一回だけでない。いままでに君を邪魔して、吸血の罪を犯させなかったことが五度もある。それは君を呪いの吸血病から、何とかして救いたためだった。……」

「なにを云う。……すると今まで、邪魔が飛び出したのは、皆お前のせいだとおいいだネ」

と、悪鬼は拳を固めて、青竜王を丁々ちようちようと擲なぐつた。探偵は齒を喰い縛くわらつて唳こらえた。

「君に悔い改めさせたいばかりに、パチノ墓地からも君を伴つて逃がしてやった」

ああ、すると吸血鬼というのは、もしや……。

「お黙り」と悪鬼は、またもや探偵の胸を殴なぐった。探偵はウムと呻うなつて悶もたえた。

「僕には君の正体が、もつと早くから分つていたのだよ。思い出してみたまえ。君が四郎少年を殺したとき、死にもの狂いで探していたものは何だったか覚えているだろう。それが官憲かんけんに知れると、立ち所どころに君は殺人魔として捕縛ほぼくされるところだった。僕はそれを西一郎の手を経て君の手に戻してやった」

「出鱈目でたらめをお云いでないよ。妾は知らないことだよ。——さあ、もう時間は剩あますところ一分だよ」

「君に悔くい改めあらたさせたいばかりに、僕は君の自由になっているのが分らないのか」

「感傷かんしょうはよせよ。みつともない」

「ああ、到頭とうとう僕ぼくの力には及ばないのか。……では僕は一切あきらを諦めて殺されよう。だが只一つ最後に訊ききたい。君はなぜ吸血の味を知ったのだ。なにが君を、そんなに恐ろしい吸血鬼にしたのだ」

「そんなことなら、あの世への土産みやげに聞かせてあげよう。——そ

れは先祖から伝わる遺伝なのだよ。パチノを知っているだろう。あれは九人の部下が死ぬと、一人残らず血を吸いとつたのだよ。妾はそれを遺書の中から読んだ。……ああ、その遺書が手に入らなかつたら、妾は吸血鬼とならずに済んだかもしれない。恐ろしい運命だ」

「そうか、パチノが先祖から承うけついで吸血病か、そうして遂ついに

君にまで伝わったのか、パチノの曾孫そうそんにあたる吾わが……」

「お黙り！——」と、悪鬼は足を揚あげて、青竜王の脾腹ひばらをドンと蹴きった。

「ウーム」

と彼が呻うきながら、その場に悶絶もんぜつした。

「ああ、それ以上の悪罵あくばに妾めかけが堪たえられると思おもっているのかい。

約束やくそくの五分間ごぶんかん以上しやべ喋しゃべらせるような甘い妾めかけではないよ。お前まへさんはよくもこの妾めかけの邪魔じゃまをしたネ」と憎々にくしげに拳こぶしをふりあげながら「さあこれから久ひさし振ふりに、生なぬるい赤あかい血潮ちまをゴクゴクと、お前まへさんの頸くび笛ふえから吸すわせて貰もらおうよ」

と云いったかと思おもうと、悪鬼あくおにの女おんなは頭あたまの上うへから被かっていた黒布こくふに

手をかけるとサツと脱ぎ捨てた。すると、驚くべし、その下から現れたのは、髪も灰色の老婆かと思いの外、<sup>ほか</sup>意外にも意外、それは金髪を美しく梳<sup>くしげず</sup>つた若い洋装の女だった。その顔は——生憎<sup>あいにく</sup>横向きになっているので、見定め<sup>みさだ</sup>めがたい！

毒の華<sup>はな</sup>のような妖<sup>ようじよ</sup>女の手が動いて、黄昏の空気がキラリと閃<sup>ひか</sup>つたのは、彼女の翳<sup>かげ</sup>した薄刃のナイフだったであろう。いまやその鋭い刃物は、不運なる青竜王の胸に飛ぶかと思えたが、そのとき何を思ったか、妖女は空いていた左手をグツと伸べて、青竜王の覆面に手をかけた。

「そうだ。誰も知らない青竜王の覆面の下を、今際<sup>いまわ</sup>の際に、この妾が見て置いてあげるよ……」

そう独ひとりごと言をいって、彼女はサツと覆面を引きむしつた。その下からは思いの外若い男の顔が現れた。両眼を力なく閉じているが、そのあまりにも端たんせい正な容貌！

「ああ、貴下は……西一郎！」

そう叫んだのは同じ妖女の声だったが、咄とつさ嗟の場合、作り声ではなく、彼女の生地きじの声——珠たまのように澄んだ若々しい美声びせいだった。——ああ、とうとう探偵の覆面は取り去られたのだった。いま都下に絶対の信用を博はくしている名探偵青竜王の正体は、白面はくめんの青年西一郎だったのだ。そして吸血鬼ほふに屠ほられた四郎少年こそは、彼と血を分けた愛弟あいていだったのだ！

「ああ、あたしは……」と妖女は胸を大濤おおなみのように、はげしく

慄ふるわせた。思いがけない大きな驚きに全く途方とほうに暮れ果てたという形だった。

「やっぱり、刺し殺すのだ！」

と叫んで、妖女は再び鋭いナイフをふりあげたが、やがて力なく腕が下りた。

「どうして貴下が殺せましょう。妾の運命もこれまでだ！」

そういつた妖女は、青竜王の身近くによると、戒いましめの縄をズタズタに引き切った。しかし青竜王は覆面をとられたことさえ気がつかない。——妖女はいつの間にか、この荒れ果てた部屋から姿を消してしまった。

かくて風前ふうぜんの灯とものようしびに危あやうかった青竜王の生命は、僅かに死

の一步手前で助かった。

大団円、死の舞踊

「——検事さん！ 雁金さんは何処へ行かれた？」

と、慌<sup>あわ</sup>ただしく、検事局の宿直室に飛びこんで来たのは、大江山捜査課長だった。

「おう、どうしたかネ、大江山君」

検事は書<sup>しよけん</sup>見をやめて、大きな机の陰から顔をあげた。

「ああ、そこにおいででしたか。喜んで下さい。とうとうポントスを探しあてましたよ。そして——大団円です」

「ポントスを生捕りにしたのかネ」

「いえ仰おつしやつたとおりポントスは死んでいました。やはりキャバレー・エトワールの中でした。ちよつと気がつかない二重壁の中に閉じ籠められていたのです」

「ほほう、それは出かしたネ」

「ポントスは素晴らしい遺品をわれわれに残してくれました。それは壁の上一面に、折れ釘おぐぎでひつかいた遺書なんです。彼は吸血鬼に襲われたが、壁の中に入れられてから、暫しばらくは生きていたらしいですネ」

「おや、すると彼は吸血鬼じゃなかったのだネ」

「吸血鬼は外にあります。——さあ、これが壁に書いた遺書の写しです。吸血鬼の名前もちゃんと出ています」

といって大江山はあまり綺麗でない紙を拵げた。検事はそれを机の上に伸べて、静かに読み下した。

「ほほう、——」と彼は感歎かたんの声をあげ「これでみると、吸血鬼はパチノの曾孫である赤星ジュリアだというのだネ。おお、するとあの竜宮劇場のプリ・マドンナ、赤星ジュリアがあゝの恐るべき兇行の主だったのか」

と検事は悲痛な面持おももちで、あらぬ方を見つめた。

「昨日、玉川で一緒にゴルフをしたジュリアがそうだったか。：

…」

そこで課長はもどかしそうに叫んだ。

「キャバレーの主人オトー・ポントスはいつかの夜のキャバレーの惨劇さんげきで、ジュリアの殺人を見たのが、運のつきだったんですネ。ジュリアは夜陰やいんに乗じてポントスの寢室を襲い、まずナイフで一撃を加え、それからあのレコードで『赤い苺の実』を鳴らしたんです。ポントスはジュリアの独唱どくしょうを聞かせられながら、頸部けいぶから彼女に血を吸われたんです。それから秘密の壁に抛り込まれたんですが、あの巨人の体にはまだ血液が相当に残っていたため、暫くは生きていた——というのですネ」

検事は黙々もくもくとして肯いた。

「ではこれから、逮捕に向いたいと思えますが……」と課長はいった。

「よろしい。——が、いま時刻は……」

「もう三分で午後九時です」

「そうか。ではもう三分間待っていてくれ給え、儂わしが待っている電話があるのだから」

大江山課長は、後にも先にも経験しなかったような永い三分間を送った。——ボーン、ボーンと遠くの部屋から、正九時しょうを知らせる時計が鳴りだした。

「遂つひに電話は来ない。——」と検事は低い声で呻うめくように云った。「では不幸な男の手紙を開いてもよい時刻となったのだ」

そういつて彼は、机のひき出しから、白い四角な封筒をとりだし、封を破った。そして中から四つ折の書簡箋しよかんせんを取出すと、開いてみた。そこには淡い小豆色あずきいろのインキで、

「赤星ジュリア！」

という文字が浮きだしていた。

「それは誰が書いたのですか」大江山課長は不思議に思つて尋ねた。

「これは青竜王が預けていった答案なのだ。君の答案とピッタリ合つた。儂は君にも青竜王にも敬意を表する者だ！」

といつて検事は、大江山課長の手を強く握つた。

「それで青竜王はどうしたんです」

と大江山が不審がるので、雁金検事は一伍一什いちぶしじゅうを手短かに物語り、九時までに彼の電話が懸かつて来る筈だったのだと説明した。「では青竜王は、吸血鬼の犠牲になったのかも知れないじゃないですか。それなら躊躇ちゅうちゅうよしている場合ではありません。直ただちに私たちに踏みこませて下さい」

「うん。……それでは儂も一緒に出かけよう」

そういつて雁金検事は椅子から立ち上った。

検察官は重大な決心を固めて、奮ふるい立った。——そして丸ノ内の竜宮劇場へ——。

一行の自動車が日比谷の角かどを曲ると、竜宮劇場はもう直ぐ目の前に見えた。その名のとおり、夜の幕の唯ただ中に、燦さんぜん然と輝かがやく

百光を浴びて城のように浮きあがっている歓楽の大殿堂は、どこに忌むべき吸血鬼の巣があるかと思うほどだった。その素晴らしく高く聳そびえている白色の円い壁へきたい体の上には、赤い垂れ幕が何本も下っさっていて、その上には「一代の舞姫まいひめ赤星ジュリア一座」とか「堂々たくえん続演十七週間——赤き苺の実！」などと鮮あざやかな文字たいしよで大書してあるのが見えた。ああ真に一代の妖姫ようきジュリア！

大江山捜査課長の指揮下に、整然たる警戒網が張りまわされた。こうなれば如何に戦せんりつ慄おそすべき魔神ましんなりとも、もう袋の鼠同様だった。

「赤星ジュリアは、ちゃんと居るのかい」

と、雁金検事は入口にいた銀座署長に尋ねた。

「はア、すこし元気がないようですが、ちゃんと舞台に出ています。一向逃げ出す様子もありません」

「そうかね、フーム……」

と検事は大きな吐息といきをした。そして秘ひそかに覗のぞき穴あなから、舞台を注視した。なるほど、ギツシリと詰つまった座席の彼方かなたに、見覚えのある「赤い苺の実」の絢爛けんらんたる舞台面が展開していた。扉ドアの隙間を通じて、

「あたしの大好きな

真紅まっかな苺の実

いづくにあるのでしょうか

いま——

欲しいのですけれど……」

と、ほうじゆん豊潤な酒のような歌声が響いてくるのであった。——

ジユリアは確かにいた。同じような肢体をもったダンシング・チームの中央で一緒に急きゆうちよう調なステップを踏んでいた。

「幕を締めさせましょうか。そして舞台裏から一時に飛び掛かかるんですか……」

「うん、——」と、雁金検事は覗き穴から目を離さなかつた。

「検事さん。早くやらないと、青竜王の生命が請うけあ合いかねますよ。」

と、大江山も日頃の競争意識を捨てて、覆面探偵の身の上を案

ずるのであった。

「うん。もうそう永いことではない。エピローグまで待つことにしようじゃないか。——それから青竜王のことだが、彼奴きやつのことなら、まあ大丈夫だよ」

と検事は先刻せんこくとは打って変つて、楽観説を唱えたのだった。

それには訳があつた。——いま舞台の上に、赤星ジュリアの右側の方に、軽いタツプダンスを踊っている燕尾服えんびふくの俳優は、紛まぎれもなく西一郎だった。つまり覆面をしていない青竜王は何事もなかつたように、たいへん楽しげに舞台に跳ねまわっているのだ。雁金検事は前からそれをよく知っていたればこそ、青竜王の肩を持ったのであつた。

だが青竜王は、傍<sup>はた</sup>から見るほど楽しく踊っているわけではなかつた。眞実彼の胸の中を切り開いてみると、九つの苦惱を一つの意志の力でもって辛<sup>かろ</sup>うじて支えているのだった。彼は既に非常警戒の網が敷かれたことも、舞台の上から見とつた。しかも舞台では、赤星ジュリアが蜉<sup>かげろう</sup>蝻の生命よりもつと果敢<sup>はか</sup>ない時間に対し必死の希望を賭け、救おうにも救いきれない恐ろしき罪<sup>ざい</sup>障<sup>う</sup>をなんとかして此の一瞬の舞台芸術によつて浄<sup>じよう</sup>化<sup>かう</sup>したいと願っている。——一つは大洪水<sup>だいこうずい</sup>のような司法の力、一つは硝子<sup>ガラス</sup>で作った羽毛<sup>うもよう</sup>のようにまことに脆<sup>ぜい</sup>弱<sup>じやく</sup>な魂——その二つの間に挿<sup>は</sup>まれた彼、青竜王の心境は実に辛<sup>つら</sup>かった。

——なんとかして、最後の舞台を力一杯<sup>つと</sup>に勤<sup>つと</sup>めさせたい！

と彼は思った。だがジュリアの舞台は、もう誰の目にもそれと分るほど光りを失っていた。

「どうも変だな。ジュリアはいまにも倒れてしまいそうじゃないか」

「あたしも先刻さつきから、そう思っていたところよ。どうしたんでしようネ。きつとジュリアは疲れたんでしよう」

——ジュリア、どうした！

と、三階席から無遠慮ぶえんりよな声が飛んだ。

それが耳に入ったのか、ジュリアはハツと顔をあげたが、その頸くびのあたりは短時間のうちにアリアリと痩せ細ってみえた。

——ジュリア、帰って睡ねむってこい！

と、続いて二階から頓とんきよう狂きやうな声が響いた。

ジュリアはいつの間にか力なく下に垂れた顔を、またハツとあげた。彼女はギリギリと上下の歯を噛み合わせた。が——右手に持った真白な鴛だちよう鳥はねの羽毛はねで作った大きな扇おうぎがブルブルと顫ふるえながら、その悲痛きわまりない顔を隠してしまった。

「別れの冬ふゆこたち木立

遺品かたみにちようだいな

あなたの心臓を

ええ——

あたしは吸血鬼……」

という合唱につられたかのように、ジュリアの顔を隠した羽毛

の扇がピクピクと宙を喘いだ。あえ——そこで曲目は断層だんそうをしたかのように変化し、奔放ほんぼうにして妖艶ようえんかぎりなき吸血鬼の踊りとなる——この舞台のうちで、一番怪奇であつて絢爛、妖艶であつて勇壮な大舞踊となる。今夜のジュリアの無気力むきりよくでは、その辺でひと溜りたまもなく舞台の上に崩れ坐るかと思われたが、なんという意外、なんとという不思議！ 彼女は生れ変つたように澆刺はつらつとして舞台の上を踊り狂つた。

ウワーツ！ という歓声、ただもう大歓声で、シャンデリヤの輝く大天井だいてんじょうも揺ぎ落ちるかと思ふような感激の旋風が、一階席からも二階席からも三階席からも四階席からも捲き起つた。

「ジュリア！ 世界一のジュリア！」

「われらのプリ・マドンナ、ジュリア！」

「殺してくれい、ジュリア！」

「百万ドルの女優！」

と、後はなにがなんだか、破れかえるような騒ぎで、合唱も器楽も揉み消されてしまった。実に空前の大喝采、空前の昂奮だった。——何がジュリアをこうも元気づけたか？

一番前の列にいた勇少年は、隣りの大辻の腕をひっぱって叫んだ。

「ああ、たいへんだ。あれ御覧よ。白い鴛鴦の扇から、真赤な血が飛び散っているよ」

「呀ッ。——これはいけない。ホウあのようにジュリアの衣裳の

上から血がタラタラと滴したたれる！」

しかし他の者は、昂奮の渦巻の中に酔って、そんなことに気をつく者は一人もなかった。ワーツワーツと、まるで闘牛場のような騒ぎだった。——その嵐のような歓呼の絶頂ぜつちように、わが歌姫赤星ジュリアは、パツタリ舞台に倒れて虫の息となつてしまった。間髪かんぱつを入れず、舞台監督の機転で、大きな緞帳どんちようがスルスルと下りた。それがジュリアの最後の舞台だった。

青竜王の西一郎は、誰よりも真まっさき先に飛んで来て、ジュリアを抱き起した。

「ジュリアさん。どうしたんです。しっかりしなさい、ジュリアさん」

ジュリアはまるで意識がなかった。

「早く医者を呼んで……」

青竜王は誰にともなく命じると、そのままジュリアを抱えあげて、とつとつと三階の彼女の部屋にまで運んだのであった。

<sup>ドア</sup>扉をあけて入ると、室の中央にはいつになく大きなソファが出てあり、その上には真白の絹の布が<sup>きれ</sup>フワリと掛けてあった。

「ああ、これがジュリアの覚悟<sup>かくご</sup>だったんです」

そういつて青竜王は、ジュリアをソツとその白絹<sup>しろぎぬ</sup>の上に横たえた。——右の上<sup>じょうはく</sup>膊<sup>はく</sup>に、喰い切ったような傷口があつて、そ

こから鮮かな血を<sup>ふ</sup>噴いてるのが発見されたのもこの時だった。

傷口は直ちに結ばれたけれど、それは彼の<sup>か</sup>深傷<sup>ふかで</sup>にとつて、何の足

しにもならなかった。

近所の医師が、看護婦を連れて飛びこんで来て、早速診察をしたけれど、その後で医師は不機嫌に首を振って、一語も喋ろうとはしなかった。

「ジュリアさん。僕が分るかい。僕は一郎だよ」

といて、青竜王はジュリアの額を撫でてやった。その声が感じたのか、ジュリアは微かに目を開いた。そして苦しそうに口を動かしていたが、やつとのことで、

「千鳥さんにも、詫びてちょうだい。……お二人して……祈つてネ……」

とまで云ったかと思うと、俄かに胸を大きく波うたせて、息を

引取つてしまった。

「ああ、お気の毒なことをしました。最早、御臨終です」と医師は脈を握っていた手を離して、ジュリアの遺骸に向い恭しく敬礼をした。

先ほどから、ジュリアの身体より遠くの方に遠慮していた雁金検事と大江山捜査課長とは、このとき目交せをすると、静かにジュリアの枕まくらもと許もとに歩をうつして、ジュリアの冥福を祈念きねんした。

「ジュリアさんの最後の舞台を見てくれましたか」と一郎は二人に声をかけた。

二人は軽く肯うなずいた。

「あの最後を飾った素晴らしい踊は、ジュリアが吾れと吾が血潮

を吸つて、その勢いでもって踊つたのです。今日という今日まで、まさか自分の血潮を啜すすろうとは思つていなかったでしょうに……」  
 といつて、一郎は暗あんぜん然と涙を嚙のんだ。そして懷中を探さぐると一と揃いの覆面を出して、ソツとジュリアの枕辺に置いた。――  
 これを見た大江山は始めて気がついたらしく、ハツと一郎の顔を睨にらんだ。

「ジュリアの死と共に、覆面探偵も死んでしまつたのです。もう探偵をするのが厭いやになりました」

そういつて青竜王ならぬ一郎は、卓たくえつ越した手しゅわん腕みずかを自ら惜たし気もなく捨ててしまつた。

ジュリアの遺骸は、彼女と仲のよかつた舞まい姫ひめたちが、何処か

らともなく持つてくる白い百合ゆりやカーネーションやマガレットの花束で、見る見るうちに埋うずもれていった。

\* \* \*

一郎は臨終のジュリアから頼まれたとおりの謝罪のことを矢走やばせ千鳥ちどりに伝えることを忘れなかった。そして、これもジュリアの望んでいたように、彼は千鳥と結婚をした。二人の仲は極めて円えん満まんである。

「君は（——と一郎は愛妻あいさいのことを今もこう呼んでいた）青竜王と一郎とが同じ人物だったということ、ジュリアさんの亡なくなった時まで知らなかったらう」

「アラ自惚うぬぼれていらっしやるのネ。一郎さんが青竜王だつてこと

は、ゴルフ場の浴室から素ツ裸のあたくしを伯父さんの病院に運んで下さった、そのときから知ってましたわ」

「へえ、そうかネ」

「へえそうかネ——じやありませんわ。あのとき自動車の中であたくしは薄目うすめを開いてみたんですの。貴下あなたの覆面は完全でしたけれど、その下から覗いているネクタイが一郎さんのと同じでしたわ。そこでハハンと思っちゃったのよ」

「そうかネ、それは大失敗だ。……しかし僕が自分より一枚上手の名探偵を妻さいくん君にしたことは大成功だろう。はッはッはッ」



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「富士」

1934（昭和9）年8月号～11月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「青竜王」と「青龍王」、「竜宮劇場」と「龍宮劇場」の混在は底本通りです。

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 恐怖の口笛

海野十三

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>